

『大いなる帰滅の物語』 最終章

第6章1節～4節の翻訳研究

岡 野 潔

略号

MSK Mahāsaṃvartanīkathā (ed. K. OKANO)

Loka-p Lokapaññatti (ed. E. DENIS)

文献 X 『有為無為決訳』第八章中に引用された書名不明の正量部作品

『大いなる帰滅の物語』(MSK)は、12世紀インドの正量部に属する大詩人(mahākavi)・阿闍梨(ācārya)サルヴァラクシタによって作られた、全6章から成る梵語の韻文作品である。この作品は正量部の内側にいる出家比丘でもあるこの詩人が、その部派独自の伝承を伝えている梵語原典である点に稀有な価値があり、現存する資料が極めて少ないためによく知られていない正量部独特の宇宙論の伝承を知る上で、最も信頼できる資料の一つである。

いよいよ最終章(第6章)の全部と、その並行文献の和訳に入りたい。これまでの発表では和訳に梵語の原文は付けずに来たが、最後の第6章第4節だけは例外的に原文も挙げることにした。そこではほとんどの詩節においてヤマカと呼ばれる詩的技法が見られ、同じ音連続を二度重ねる言葉遊びであるが、原文なしにその翻訳だけを挙げると、かえって読者の詩の理解を困難にする恐れがあるからである。本作品の最終節で作者が披露するこのヤマカの修辭的技法は極めて卓越したものであり、もしこの第4節の部分だけしかこの詩人の作品が写本で後世に伝わらなかったとしても、その部分からうかがえる詩的技量の高さから、この作品を作った詩人の名はやはり矚目に値したであろう。

「榮譽ある偉大な大師匠」(śrī-mahāmahopādhyāya)サルヴァラクシタは、

1172年に完成したシャラナデーヴァ作の梵語文法学書 *Durghaṭavṛtti* において、そのコロフォンに、弟子 (*chātra*) のシャラナデーヴァの頼みによりその作品を改訂する役割を果たした者としてその名が記されており⁽¹⁾、彼が文法学者でもあったことが知られる。梵語の達人としての彼の詩的技量は、言語への深い造詣に裏打ちされていたことがわかる。彼の梵語詩人としての力量は、馬鳴から始まる千年にわたるインド仏教の梵語文学史の著名な詩人たちと比較しても群を抜いており、恐らく五指に入るほどのものである。サルヴァラクシタは12世紀のインド東部地域の文芸世界において活躍したと思われるが、この後13世紀初頭にインド仏教の最後の拠点であった巨大寺院が悉くイスラームの軍隊の攻撃を受けて、インド仏教はその独自の文化的生産力を失い、消滅への道を歩み始める運命を考えるならば、この MSK という作品は、瀕死のインド仏教が歌い遺した、白鳥の歌であるといえる。

この、インド仏教が滅亡間近に実らせた至極の一粒の果実は、イスラーム軍による文化破壊によって消滅しても不思議ではなかったが、カトゥマンドゥ盆地に伝えられた写本によってかろうじて亡失を免れ、ネパールの写経生たちのおかげで一詩節も欠けることなく全390詩節が現代まで伝わった。このことだけでも実に稀有なことといえるが、さらにこの詩人に関して、最近別の詩作品が再発見されたのは驚きに価する。サルヴァラクシタのそのもう一つの詩作品の写本は、イタリアの高名な仏教学者 Giuseppe TUCCI がチベット寺院 Kong dkar chos grwa で1948年に入手した Bhaikṣuki 文字で書かれた貝葉写本としてあり、ローマに持ち帰られた後長らく行方不明であったが、1999年にその写本写真が Francesco STERRA によって見出され、今やその未知のテキストの全貌を知ることが出来るようになった。その作品の名は *Manicūḍajātaka* といい、Marburg 大学の Michael HAHN 教授の協力・指導のもとに彼の弟子 Albrecht HANISCH によって、世界で初めて写本から厳密にローマ字に転写されたテキストが発表された⁽²⁾。それは376詩節から成り、1詩節の欠損もない完全なテキストである。その作品が Patna Dharmapada のテキストの言語に似た、正量部の部派固有の聖典語らしい中期インド語で書かれている点では、正確な古典梵語で書かれた MSK とは違っているものの⁽³⁾、所々にこの詩人が得意とするヤマカの詩的技法が見られ、また MSK と同じ

ように *āryā* 調の韻律が多用されており、独特の語句表現も似ているなどの点から、同じ詩人の作品であることは疑いがない⁽⁴⁾。

振り返れば、サルヴァラクシタの作品 MSK がインド仏教学の学問の俎上に載せられてようやく20年が経った。私がサルヴァラクシタという未知の詩人が作った MSK という謎の作品がネパール写本カタログ *Bṛhatsūcipatram* の中にあることに気づき、カトゥマンドゥに滞在してそのマイクロフィルムを入手したのは留学直前の1992年1月であったが、その後1997年に HAHN 教授の指導により Marburg 大学に提出した MSK の校定・独訳を初めて行った私の博士論文の序論で (S. 16-18)、G. TUCCI がチベットの寺院で入手したという行方不明の *Mañicūḍajātaka* という作品が MSK と同じ作者サルヴァラクシタによる正量部の伝統に基づく詩作品である可能性が高いことを指摘してから、その写本が—— HAHN 教授による TUCCI 写本再調査の懇望が効を奏してか—— 1999年ローマにおいて実際に写真が再発見されるまでは、2年しか経っていない。そして2008年の HANISCH の発表によって、その二つ目の作品 *Mañicūḍajātaka* の全テキストが公表されたので、これで同じ詩人の二つの作品が約850年ぶりに世に出揃ったことになる。このような、約850年後のわずかな期間に続けざまに起こった二作品の「出現」を、まさしく機が熟したというのであろう。この詩人の作品の鑑賞・評価は始まったばかりであるが、一つは極めて上質の梵語で書かれ、もう一つは謎の中期インド語で書かれた、珠玉のような彼の遺した作品は、その際立つ独自性によって、インド文学史の中でも特異な地位を占めるものと思われる。

第一部 翻訳 MSK 第6章第1節～第4節

第6章第1節 帰滅し終えた状態の時期 (空劫) の教義

[6.1.1] このようにして世界が空虚になり、[四大] 要素の場所 (*dhātvaśpada*) である虚空がいちめんに残る。まるで無明によって [生類が] 染汚された心になるように、極めて暗い闇夜によって [世界は] 暗黒となる。

[6.1.2] まさに20劫の間、……の者たち⁽⁵⁾に快い、そのような [暗黒] が存

続するだろう。帰滅の頂（破壊運動の上限）で、重い世界という荷物を置いて、眠りについたかのようなのである。

【並行資料：L19, L38, 文献X §209, 立世論 T32 223b27-c1】

[6.1.3] 『劫』(kalpa)により、諸世界の[成住壞空の]時の長さが理解された。しかし『劫』とはどれほど長いものか、それが教義として説明されるべきである。なぜなら仏陀の言葉は、もし説明されるなら、満月のように、輝きを与えるものであるから。

[6.1.4] 2クローシャの大きさの金属製の都城を、『空想』という職人の創作行為によってここに(地上に)形作ってから、自分の『知性』という農地によって産出された[空想上の]身をもつ芥子粒をもって、それ(都城)が[満たされて]、頂きが平らにならされるべきである⁽⁶⁾。

[6.1.5] [そして]百年が終わる度に、そこ(都城)から芥子粒の一つずつを、惑乱なき者が[正確に]取り去るとしよう。このようにして、芥子粒の集積が尽きたとしても、一つの『中間劫』が過ぎていない。

【並行資料：文献X §218】

[6.1.6] 同様に、1ヨージアナの大きさの別の最勝の都城が、[芥子粒によって]山盛りに満たされて、造られるべきである。その極めて大きな蔵が、同じ様に尽きた後にも、『大劫』(mahākāpa)は海のように尽きることがない。

【並行資料：文献X §220】

[6.1.7] 帰滅した状態の持続期(空劫)が終わった時、80[中間]劫を有する劫の王(大劫)は、円盤が一回転するかのよう、ただちに世界を転じさせて、[また]進んでゆくであろう。

【並行資料：文献X §219】

[6.1.8] その[大劫が転じた]後に、[以前と]全く同一の輪転の規則を有

するもの（新たな世界）が [現われ]⁽⁷⁾、その後すべての存在者が現れる。[先に] 語られた道筋と同じ様に、輪廻の車輪の上で、あらゆる出来事のすべてが [現れる]。それ故、今やここで（この世界で）、河の渦巻きのような、多くの危難ある生存（*bhuvana）の中に沈むべきではない⁽⁸⁾。賢い人々にとって、あらゆる危難からの出離である、その [生存の] 彼岸に達することがふさわしい。

第6章における、『帰滅し終えた状態の時期（空劫）の教義』という第1節 [おわる]。

第6章第2節 二つの帰滅の教義

[6.2.1] いつか帰滅の時にいたり、人々は『喜』を伴った一切の欲を非難し、第三禅を [天界への旅の] 糧食としてから⁽⁹⁾ 遍浄天 [の天界] という⁽¹⁰⁾、帰滅の頂（破壊運動の上限）に行く。

【並行資料：L1～L7, 文献X §211, cf. 世記経 T1 139c-140a】

[6.2.2] 生ける者たち（衆生）がいなくなって、この土台である世界（器世界）すべては、[彼らとの] 別離の悲しみに因るかのようになり、出現した七つの月をもち、それらの [月を] 原因として、いたる所で増大した水のなかに完全に没して、壊滅するにいたる⁽¹¹⁾。

【並行資料：L10～L16, 文献X §212, cf. 世記経 T1 140a-b】

[6.2.3] また別の時に再び帰滅の時を迎えたこの [世界の] すべての生ける者は、『楽』を伴った諸欲は多くの過罪に汚れていると理解して⁽¹²⁾、第四禅に依って、[彼らの心の] 寂靜に適合した、広果天 [の天界] という帰滅の頂（破壊運動の上限）に行く。

【並行資料：L23～L25, 文献X §213, cf. 世記経 T1 140b-c】

[6.2.4] すると風が起こり、この器たる世界（器世界）を帰滅させつつ、いたる所で激しく吹く⁽¹³⁾。地・火・水の集積体も震わせられて、寄る辺無く、

壊滅するにいたる⁽¹⁴⁾。

【並行資料：L29～L35, 文献X §214, cf. 世記経 T1 140c-141a】

[6.2.5] 三つの帰滅 (大三災) を有したため⁽¹⁵⁾、生ける者すべてがいなくなったサハー (娑婆) というこの住処すべてが、三種のかたちで、不可避に滅びに陥ると同様に、無数の生ける者の住処である他の諸世界も、滅びるにいたる⁽¹⁶⁾。まさにそれ故に「[あらゆる] 形成物 (有為法) は恒常ではない」⁽¹⁷⁾。これが牟尼 (仏) の [説かれた] 真実なる教えである⁽¹⁸⁾。

【並行資料：文献X §217】

第6章における、『二つの帰滅 (saṃvartanī) の教義』という第2節 [おわる]。

第6章第3節 真実義を照らし出す

[6.3.1] 敵を降伏させる方 (仏) は、世界についての、業という初めの原因の法話によって、(A) それ (世界) に「因あること」を、(B) 「まやかしてあること」を、(C) 「前から有るのではないこと」を教えつつ、(*A) 無因論、(*B) シヴァ神原因論、(*C) 有の常在論という⁽¹⁹⁾、外道たちのもつ前際 (宇宙の過去) の [諸見解] を⁽²⁰⁾、無意味なものとなした。

[6.3.2] また火と水と風による破壊 (大三災) を説くことで、彼ら [外道の] 諸説としての、未来の出来事を退けた。この太陽は東方の闇を駆逐して、どうして西方の闇の集まりを追い払わないことがあるうか⁽²¹⁾。

[6.3.3] 燃焼・灌注・震動など、全世界にある、目的ある行いを教示することによって、『何も存在しない』 (nāsti) という [外道] 師らの見解を、師たちの王 (仏) は無意味なものとして、ただ一掬の水のみのための鉢 [のような無用の存在] となした⁽²²⁾。

[6.3.4] 滅びによって『苦』を示し、他による生起によってその『原因』

を、対治 (vipakṣa) の手段によって『解脱』を、[解脱の] 達成可能性によってその [解脱への] 『道』を教えながら、[修行者たちが] あらゆる『見道によって断ずべきもの』(見道所断) を断ずるために、一切を知る方 (仏) は、寂靜なる境地を教示された⁽²³⁾。

[6.3.5] 諸行 (saṃskāra) を厭悪する言葉によっても、修道位とよばれる境地を [仏は] お説きになった；世界における勇猛 (精進) によって、捨てるべき (修道所断) [煩惱] を断じるために。[さらに] 貪欲が滅していないならば、その境地は無学ではないので、それ故 (iti) 離欲の教えの教義によって、その [境地] も学ばれる⁽²⁴⁾。

[6.3.6] 寂靜によって安らかなる、自ら好んで他者の利益を欲する、牟尼 (仏) のその言葉を聞いて、弟子たちは寂靜へ導かれるべきである、——彼ら自身に適切な、[見道・修道・無学道の] 三つの形をもつ、より高い、すばらしい境地へ。それは、稀有のことではなく、よく [自然に] なされうることである —— 暗愚がなく、正しく見る人々が、生類を支持する最勝なる存在 (仏) に対して心を向けた者たちが、完全な卓越にいたる、ということ

第6章における、『真実義を照らし出す』という第3節 [おわる]。

第6章第4節 師の時節の経過

このMSK第4節はほとんどの詩節がヤマカ (yamaka) という、同一の音連続を反復する言葉遊びを有する。各詩節のもつ意味はこの同音異義の音遊びに大きく依存しているため、以下の各詩節では和訳の前に梵語の原文も示すことにしたい。太字で示した箇所がヤマカである。

kathāvasāne sadharādharā dharā
prajātakampā sakalā kalākalā /
prakīrṇapuṣpābharāṇāraṇā

babhau mudevāsahasāhasāsāḥasā //

[6.4.1] [仏の] 法話が終わると⁽²⁵⁾、とても甘美な響きを発する⁽²⁶⁾、[神々に] 撒かれた花という装飾をもつ、煩惱なく (araṇa) 平和である (araṇa)、山々をもつ (sadharādhara) 大地すべては、震動を生じた。[それは] まるで喜びにより、我慢できない激しい笑いを⁽²⁷⁾もつかのように見えた⁽²⁸⁾。

mahāmahāyāsuram ākulaṃ kulaṃ

sadā sadābhaṃ vahatābdhinādhinā /

vinā vinādaṃ ca vidhitsatā satā

nabho na bhodbhūtivirājitaṃ jitaṃ //

[6.4.2] [仏陀の説法を祝う]大祭のため、常に美しい輝きをもつ (sad-ābha) アスラたちの混み合う (ākula) 群を担いつつ、[熱狂の] 大騒ぎの声を (vināda) 出さんと欲している底なしの海に、星の出現で (bhodbhūti) 輝かされた天空は [美しさにおいて] 負けなかった⁽²⁹⁾。

ghanāghanāśāmṛtabhojanair janaiḥ

samaṃ samantāt pavanāśanaiḥ śanaiḥ /

ghanair ghanair apy anileritair itai

raver aveśā vihītāśu bhā śubhā //

[6.4.3] とても濃厚な食事であるアムリタ (甘露) を食する者たち (神々) のおかげで、[また] いたる所で、『風を食する者』(蛇) たちと一緒に (samaṃ)、徐々にゆっくり風に吹き動かされて厚い雲が去ったために、太陽の美しい輝きは、速やかに無衣にされた (覆い隠すものを失った)⁽³⁰⁾。

na vai na vairam vyaticakrame krame

same sametaṃ suradānavaṃ navam /

mano manojñaṃ tam upānayan nayaṃ

sabhā sabhā yena babhau savāsavā //

[6.4.4] 神々と魔族 (アスラ) がもつ、同じ歩調で高まり来た最近の敵意は、[この説法の時に] 超克されないことはなかった。[彼らの] 心はその [仏の]

説法の] 快い教義を受け入れた。インドラ神がいる輝かしい [神々の] 集会場はそれによって輝いた⁽³¹⁾。

prakāśya nātho 'py akatham**kathām kathām**
vidhāya nṛṇām sukhasam**hitam hitam** /
vyabhāt parīto vīgatāṅga**nair gaṇai**
ravir yathā dhvāntavīpat**karaiḥ karaiḥ** //

[6.4.5] [世界の] 庇護者 (仏) も、疑いのない法話を明示して⁽³²⁾、人々に安楽を伴った利益を与え、穢れのない [四衆の] 群に囲まれて、輝いた。あたかも太陽が、闇を滅ぼす光線によって輝くように。

prakāśayan dharmam athā**param param**
nayan trilokaṃ vinayā**padam padam** /
prabhāvayan svaṃ budhasam**matam matam**
vībudhya kṛtyaṃ bahusaugataṃ **gatam** //

[6.4.6] さらに別のすぐれた法を教示しながら、戒律を基盤とする境地に三界 (全世界) を導きつつ、多くの善逝たちが [進んだ] 適正な (kṛtya) 行路を悟ってから、賢者たちに認められた自分の見解を広めつつ、――

prabhāprabhāvena vidhāya bhāsurā**m**
mahim ahināṃ sanarāmarāsurā**m** /
kalākalāpīva śaśī tathāgataḥ
samāḥ samāsthāya śivas tam āgataḥ //

[6.4.7] 光明の威力によって、人間と神々とアスラを含むすべての大地を、輝くものに変え、月が十六部分 (kalā) の集合体として [月齢をもつ] ように、如来は [多くの] 年 (寿齡) を取った後、至福 (śiva 大般涅槃) が彼に到来した⁽³³⁾。

athātīśokād iva sā calācalā
vadhūr vinātheva ghanārasā rasā /⁽³⁴⁾

vanāgrapuṣpaś calaśekharā kharā
vyakampayat śocitabhājanam janam //

[6.4.8] 大きな悲歎によるかのように、激しく動揺するその大地は、まるで夫を失った妻のように、甚だ無情感となり、硬くこわばった女 (kharā)、森林という最高の花々を伴う震動する冠 (山々の頂) を被る女として、悲歎の器となっている人々を震わせた⁽³⁵⁾。

vidhūya vāyur jagato 'śruśikaram
prakīrṇamuktāsamatāvāśikaram /
cakāra tenāiva mahīm vibhūṣitām
parārthasiddhyai bahudhā vibhūṣitām //

[6.4.9] 撒き散らされた真珠に匹敵する涙のしずくを⁽³⁶⁾風は [あらゆる] 人々から振り落とし、その [涙のしずく] によって、利他の成就のために全能者 (仏) によって住まわれた大地を、幾たびも飾られたものとした。

phaṇīndrasaṃghāḥ phaṇaratnabhūṣaṇāḥ
samunnamantaḥ paritovibhūṣaṇāḥ /
nījāśrumiśraṃ bahuratnasamnidhiṃ
visarpayām āsur anekadhodadhim //

[6.4.10] 宝石をかさ (蛇の頭部のフード) の飾りとして持ち、体いちめん宝飾に覆われた蛇王 (ナーガ) の群は、身を起こしつつ、自らの涙が混じった、夥しい宝石の集積地である海を、繰り返し [涙で] 増大させた⁽³⁷⁾。

sametya lokā daśadhātuvāśinaḥ
śucā paritāḥ kusumādyavāśinaḥ /
muneḥ śarīraṃ bahutūryarāsitair
vicitrakārair nirahārṣur āsitaiḥ //

[6.4.11] 悲しみに満ち、花などの香を持つ⁽³⁸⁾、十方世界に住む者たちが集まって来て、牟尼の御遺体は、多くの楽器を響かせる者たち、様々な礼賛をなす [儀礼] 執行者たちによって運ばれた (葬送された)⁽³⁹⁾。

vidhātum arthaṃ ruciraṃ ciraṃ nṛṇām
 avāpa bodhiṃ dayayā yayā vibhuḥ /
 adhiṣṭhitaṃ sambhṛtayā tayā vapur
 dadhe 'sya dhātuprakarākāratām //

[6.4.12] 永きにわたるすばらしい利益を人々に与えるために、全能者（仏）は憐れみにより、悟りを得られた。満ちあふれる（sambhṛta）その [憐れみ] によって支配された肉体は、彼の遺骨をやや多量に与えた⁽⁴⁰⁾。

munau praśānte jananetraśāsanam
 gate 'stam āditya ivāvabhāsanam /
 pidhātum ujjagmur udīrṇagarjanā
 akālameghā iva bhūridurjanāḥ //

[6.4.13] 太陽が没した時、[その] 輝きを隠そうとして、大きな雷鳴をもつ不時の雨雲が現れるように、牟尼（仏）が亡くなられた時に、大衆を導く方の教えを隠そうとして、多くの悪人どもが現れた⁽⁴¹⁾。

sametya teṣāṃ pratipakṣato 'kṣato
 munīndrasaṃgho 'śubhavāraṇo 'raṇaḥ /
 yathoktasamgītimayīṃ diśaṃ diśan
 vyadhāj jinājñām atibhāsvarān svarān //

[6.4.14] 彼ら（悪人）の中の論敵どもによって傷つけられることがない、[人々を] 罪から防護する、煩悩のない（araṇa）牟尼の王の僧団は集合して、既述の⁽⁴²⁾、合誦（結集）からなる [仏の] 教説を [人々に] 教示しながら、勝者（仏）の教誡を輝かしい音声にしたのだった。

saṅgītikārādhigatārthanirṇayaiḥ
 prajñādayābhyām avadhūtadurnayaiḥ /
 saṃkīrtiyamānā sujanair anekadhā
 lokārthakāmena kṛtā mayā kathā //

[6.4.15] 合誦（結集）を行うことで意味の確定を得た者、智慧と慈悲によつ

て悪行を払い捨てた者である、有徳の人々によって、繰り返し称賛された
[法] 話を、私は世間を利益せんことを願って、作成した⁽⁴³⁾。

sūktam yad eva bhavitātra tad eva buddham
syāc ced dviruktam api kiñcana tan madiyam /
ālokaṃ eva vidadhāti sadeva bhānuś
cakṣuḥprabhāvaharaṇam na tamas tadiyam //

[6.4.16] この [作品] で、美句 (sūkta) たりうるものがあればそれはすべて
仏陀に属する。若干 (kiñcana) [不必要な] 重複した言 (dvirukta) があ
ればそれは私に帰せられる。彼に属する (tadīya) [美句] は、常に太陽の
ように光明を与えるのであり、眼から光を奪う [ような] 闇を [与えること
は] ない。

abhyāsayogavidhinā vacane 'tra buddhe
puṇyam viśuddhisubhagam yad upārjitaṃ me /
tenāvagamya nikhilān svayam eva bhāvān
kṛtvā nṛṇāṃ karagatān iva darśayeyam //

[6.4.17] 仏の言葉について反復学習の努力をすることにより、清浄さの故
に幸をもたらす (viśuddhisubhaga) [すぐれた] 福德を私は獲得し、その
[福德] の力によって、まさに [私] 自ら一切の事を理解してから、[次いで]
人々にとってまるで掌上にあるかのように [わかりやすいものに] して、
[それらを] 教えてあげたいと願う。

『師の時節の経過』 (Guruparvakrama) という最終節終わる⁽⁴⁴⁾。第6章
『様々な事項についての章』 [終わる]。

『大いなる帰滅の物語』 (Mahāsaṃvartanīkathā) 終わる⁽⁴⁵⁾。大詩人 (mahākavi)
で阿闍梨 (ācārya) である、荣誉ある (śrī-) 大徳サルヴァラクシタ (bhadanta-
Sarvarakṣita) の作。

[跋文:]

[この作品には] 390の詩節(vṛtta)がある⁽⁴⁶⁾。アヌシュトゥプ韻律によって数えられた時には534詩節が量としてある⁽⁴⁷⁾。詩節量534である(gra pra 534)。

[A写本 (NGMPP A38/12) の写経生の後書:]

『諸々の存在は原因から生じる。如来はそれらの原因を説きたもうた。またそれらの止滅をも説かれた。大沙門はこのように説くおかたである。』⁽⁴⁸⁾ すべての生きとし生けるものに幸あれ。544年⁽⁴⁹⁾、アーシャーダ月。

[B写本 (NGMPP B97/8) の写経生の後書:]

782年⁽⁵⁰⁾、シュラーヴァナ月、白分の15日。

第二部 並行文献の和訳

この第二部では先の MSK 第 6 章の内容に関連する文献 X と Loka-p の相当箇所を翻訳を示したい。

まず文献 X の訳を以下に示したい。文献 X は §1 から §199 までは MSK の第 2 章第 1 節から第 5 章第 2 節までの多くの詩節と内容がよく合致しており、連続的に文が対応してゆくことが多かったが、§200 以下はその対応の仕方が連続的ではなくなってくる。§202 までの和訳は『哲学年報』第 63 輯から第 68 輯までの一連の拙稿にすでに発表したもので、以下に、文献 X の最期の部分 (§§203-222) の訳をまとめて示したい⁽⁵¹⁾。文献 X のこの箇所は MSK との対応関係が飛び飛びになるため、これまでの論文のように MSK の各詩節ごとに文献 X の翻訳を付随させてゆくのをやめて、残余の箇所の訳をここにまとめる次第である。

文献 X

[§203] 火と水と風の三種の帰滅が、間を置かずに、順々に三つ一組のものとして出現するということは、[教義として] 確定されていない。火の帰滅

が出現する時に [同時に] 水と風の帰滅は現われないし、水の帰滅が出現する時には火と風の帰滅は現われない。風の帰滅が出現する時も同様である (火と水の帰滅は現われない)。それぞれの帰滅に (すなわち衆生世界と外器世界の帰滅に)、20中間劫かかる。それ故、大なる帰滅の劫 ('jig pa'i bskal pa chen po) は⁽⁵²⁾、20中間劫にわたる。

[§204] 次のように [要約の偈頌が] 説かれる。

独りブラフマー神 (梵天) は [初めの] 10劫の間住する。彼の侍者たちの住処 (de yi 'khor gnas)⁽⁵³⁾ は [第11劫の] 1劫で形成された。[その後] ブラフマ・カーイカ天 (梵身天) から下はヤーマ天 (夜摩天) に至るまで、それぞれ [の天界の住処] は [第12劫から第17劫まで] 各 1劫ずつかかって [順に] 出現する。大地や山などは [第18劫の] 1劫で形成された。自ら光を放つ者たち (最初人間たち) は [第19と第20劫の] 2劫かかって形成された。[こうして] 太陽の誕生の時に至る。このように成劫が [全部で] 20劫 [経過する]。

[§205] [住劫が始まり] 地の精脂 (sa yi zhag 地の乳脂) と、[地の] 餅 (khur ba) と、林 [藤] (tshal) と、稲 [の時期がある]。これらは安楽の状態 (*sukhāvasthāna) [の時期に属する]。[それらは] 8劫であり、他の [残りの12] 劫は始終、安楽と苦 (*sukhaduḥkha) [の状態] となる。

[§206] [稲の] 穀の出現などは、[第9劫以降の] 12劫 [の間である]。それらが起成した後に、壊劫が20劫 [続く]。

[§207] その [住劫の] 後、10劫かかって安楽を有する (*sasukha) 生ける者たちは、帰滅するだろう。

[§208] その [衆生散壊の] 後、1劫半の間、雨が降らない。その後、別の五つの太陽が [順次に] それぞれ1劫半の間、[六欲天の各世界の] 頂に出現して、下方 [の世界] を焼く。第七の太陽が1劫の間、一切を焼くが、[それが第] 20劫 [である]。これら [20の中間劫] で [衆生世界と器世界が] 悉く滅する。それ故、壊劫 (*saṃvartakalpa) はちょうど20劫から成る。

[以上でまとめの偈頌終わる]

[§209] その [壊劫の] 後、このような [世界の] 場所は空虚で、虚空 (*ākāśa) のみで、まさに20劫の間存続するだろう (*sthāsyati)。[対応 : MSK 6.1.2]

[§210] その [空劫の] 後、再び以前の如く、成劫等の一切が [ある]。

[§211] [水災と風災についての補足的説明:]⁽⁵⁴⁾ その後或る時に、第二禅天に住む生ける者たちは、喜を伴った [感官の] 対象への諸欲に (don gyi 'dod pa) 厭嫌を起こして、第三禅を生じさせて、そこ (二禅天) から死没してから、第三禅天に生まれる。[対応: MSK 6.2.1]

[§212] その後、そこに (二禅天に) 七つの月が出現する。出現した月を原因として、水があまねく至る所で増大し、第二禅天が完全に滅びる。[対応: MSK 6.2.2]

[§213] その後、楽を伴った諸欲には、多くの悪徳が現れると理解して、第三禅天に住む生ける者たちは第四禅を生じさせ、それを原因として第三禅天から死没した後、帰滅の [運動の] 上限たる第四禅天・広果天 (*Bṛhatphala) に生まれる。[対応: MSK 6.2.3]

[§214] その時、器世界が残らず滅びる時に、その時極めて強力な風が、あまねく至る所に広がり及ぶ。その風によって [世界] すべてが破壊され、三つの帰滅が完全な姿で出現する。すなわち火による帰滅、水による帰滅、風による帰滅である。[対応: MSK 6.2.4]

[§215] この三つの帰滅により、二つの帰滅が完結する。すなわち『生ける者たちの帰滅』 (*sattva-saṃvartanī 衆生世界散壊) と『物的世界の帰滅』 (*dhātu-saṃvartanī 器世界散壊) である。

[§216] このように残りの帰滅 (水と風の帰滅) によって、サハー (娑婆) という名の、残余を有する (lhag ma dang bcas pa) [この] 世界は滅びる。他の諸世界も [それぞれ] 適正な時に従って、同じ様に、帰滅 (*saṃvartanī) と起成 (*vivartanī) の法を有する。

[§217] さらにまた次のように [偈頌で] 説かれる⁽⁵⁵⁾。

『三界のサハー (娑婆) という名の住处と生ける者たちは完全にすべて消滅して、すなわち三種の帰滅 (*trisāṃvartanī) の [滅びへの] 落下 (*prapāta) に支配される。同じ様に [サハー以外の] 他の [あらゆる] 諸世界、無数の生ける者たち、諸住处も滅尽する。それゆえ有為法は恒常ではない (des na 'dus byas brtan yod min)、と説かれた牟尼の教えは実に真実である』と。

[対応: MSK 6.2.5]

[§218] また『劫』の長さは[かくの如くである]。高さと横幅に2クローシャを測った一つの立方体が作られてから、頂が山盛りにならないように、芥子粒(*sarṣapa)が満たされた後、その住処から百年ごとに芥子粒を一つずつ取り出してゆくことによって、すべての芥子粒が尽きたなら、それまでの消費にかかった全時間の長さが、『中間劫』である。[対応: MSK 6.1.4~5]

[§219] その中間劫を用いると、帰滅(破壊運動)と起成(形成運動)の定まった長さは80中間劫になる。80中間劫は1大劫である。[対応: MSK 6.1.7]

[§220] さらにまた『大劫』は次のように計量される。高さと周長に1ヨーヅァナを測った住処が、山盛りに芥子粒によって満たされた後、その住処から百年ごとに一つずつ取り出して行って、芥子粒が完全に尽きるまでかかる全時間の長さを、『大劫』という。[対応: MSK 6.1.6]

[§221] このように賢劫などの大劫は⁽⁵⁶⁾、[その]数の位が60桁に達した時、阿僧祇(asaṃkhyā 無数)と呼ばれる⁽⁵⁷⁾。

[§222] ここで60桁とは次の通りである。[1] 一の10倍は十である。[2] 十の10倍は百である。[3] 百の10倍は千である。[4] 千の10倍は万である。[5] 万の10倍は Lakṣa である。[6] Lakṣa の10倍は Atilakṣa である。[7] Atilakṣa の10倍は Koṭi である。[8] Koṭi の10倍は Madhya である。[9] Madhya の10倍は Ayuta である。[10] Ayuta の10倍は Mahāyuta である。[11] Mahāyuta の10倍は Nayuta である。[12] Nayuta の10倍は Mahānayuta である⁽⁵⁸⁾。[13] Mahānayuta の10倍は *Nema である。[14] *Nema の10倍は *Mahānema である。[15] *Mahānema の10倍は *Prasuta (or *Prayuta) である。[16] その10倍は *Mahāprasuta (or *Mahāprayuta) である。[17] その10倍は *Kaṃkara である。[18] その10倍は *Mahākāṃkara である。[19] その10倍は *Acaraṇa である。[20] その10倍は *Mahācaraṇa である。(原文はこの調子で続いてゆくが、[21]~[57]の訳を省略する).....[58] その10倍は Vibhūta である。[59] その10倍は Bālākṣa である。[60] その10倍は Mahābālākṣa である。以上が60桁である(その次の桁が阿僧祇 Asaṃkhyā である)。

或る者は、阿僧祇は18桁を越えている、と説く。

*

以上の§222の「以上が60桁である」の文の箇所、『有為無為決択』の作

者 Daśabalaśrimitra は、文献 X（題名が知られない正量部文献）からの長大な引用を終えていると考えられる⁽⁵⁹⁾。そこから以下の文は、文献 X からの引用文ではなく Daśabalaśrimitra が諸部派の様々な資料を示しながら部派の見解の違いを紹介している文と見なす。しかし阿僧祇の話題が続いているので、参考のためにその後の文も少し訳してみる⁽⁶⁰⁾。

[§223] 聖上座部によれば、1 桁から始めて前述の通りに505桁に達した時、それが『小の阿僧祇劫』であり、それから [更に] 『小の阿僧祇劫』を始めの1桁として数えて、55桁に達した時に、阿僧祇劫になる、と説く。

[§224] 聖正量部によれば、この釈迦牟尼は、第一の阿僧祇において前釈迦牟尼仏から [始めて] 7万7千の仏を、第二の阿僧祇においては7万6千の仏を、第三の阿僧祇においてはインドラ・ドヴァジャ仏に至るまでの7万5千の仏を供養して、無上正等覚を悟ったと伝えられる⁽⁶¹⁾。

犢子正量部の聖典伝承『ローカ・パンニャッティ』

Loka-p の水災と風災の記述にあたる箇所 (DENIS, I, 216.13-220.7) を以下に和訳する。漢訳の立世論は火災品で終わり、それに続くはずの水災品と風災品にあたる箇所が欠けている。それら二品も本来立世論のインド語の原典には存したはずであるが、現存する漢訳の諸版では残念にも、火災の後の世界生成の記述において所謂『アッガンニャ神話』の四種の神話的食物の出来事を語る途中、突然中断して終わっている⁽⁶²⁾。漢訳が欠損したこの水災と風災の記事の部分を Loka-p の以下のテキスト部分は伝えているため、貴重である⁽⁶³⁾。

L1 《p. 216, l. 13》その時人間たちは [十善業道を] 希求する者となる。

L2 集会場や [屋根に] 覆われた [所] に坐った彼らに、次のような会話がある。『以前の間人たちはこのようであった。欲望のゆえ、[欲望を] 原因として、互いに母と子が [言い争い]、互いに父と子が [言い争い]、兄弟と兄弟が、姉妹と姉妹が、友と友が、従者と従者が [言い争った]。[激しい]

言い争いになった彼等は互いに手で加害し、拳や土塊や武器や刀で [打ち合い] 命を奪い合った。[と]。《p. 217》[それを聞いて] 『ああ、欲望とは厭わしいものだ』と [人々は言い]、欲望を非難する。[かの者たちは] 欲望を非難して、欲望における過患を [他の人々に] 明らかにする。

L3 人間ではない者たちは、彼ら [人間] の、欲望における過患を見て、声を [人々に] 聞かせる：『親しい皆さん、第三禪は喜を離れたものです。そこに到達して [その天界に] 住みなさい』。彼ら人間たちはかの人間ではない者たちの声を聞いて、強く信じる (信解する)。

L4 村や市場町や諸国の人々は、欲望における過患を思惟して、[第三禪の] 喜を離れた状態を寂靜に観じながら住する。[彼らは] 第三禪を生じさせた後に、命終して、スバキン八天 (遍淨天) に生まれる。

L5 同様に、地獄の者や、水と陸の生き物である畜生や、餓鬼界の者や、アスラたちは、それらの [世界] からこの世界 (人界) へと [転生して] やってきて、欲望における過患を思惟して、[第三禪の] 喜を離れた状態を寂靜に観じながら住する。[彼らは] 第三禪を生じさせた後に、命終して、スバキン八天に生まれる。

L6 西ゴーヤーナの人々はそこで [第三禪を] 生じせしめて、そこから [スバキン八天に] 行く。[また] ここ (ジャンプ洲) に [転生してから第三禪を] 生じせしめる者たちは、ここから [天に] 行く。

L7 地獄が空虚になる時が来る。同様にすべての [世界が順次に] 空虚になり、梵天世界が [空虚になる]。

L8 十千世界にひとり大梵天だけが [残る] 時が来る⁽⁶⁴⁾。

L9 ここまで (このような状態まで)、『生ける者たちの帰滅』(衆生世界散壞) が [展開した]。ここまでに10中間劫が過ぎ去る。

L10 『第二の帰滅』が現れる時がくる。[水による帰滅である。] その時長期にわたって、アーマラカの [実の] 大きさの雨滴をもって、隠元豆の大きさの [雨滴] をもって、天は雨ふらず。………⁽⁶⁵⁾、多年の間、数百年の間、数百千年の間。

L11 それ (水の集まり) はこの大地を揺さぶり動かす。

L12 そして巨大な水の集合体 (āpokhandha) によってかのスメール山王が

襲われる時、百ヨーjanyaの峰峰は溶解し、二百ヨーjanyaの [峰峰] も、三百ヨーjanyaの [峰峰] も、四百ヨーjanyaの [峰峰] も、五百ヨーjanyaの峰峰も溶解して消滅する。

L13 外のメールの山々における《p. 218》水の元素は激動する。

L14 [大地の] 下方においても、水の集合体がこの大地を揺さぶり動かす。

L15 たとえば八箇月間 [太陽に] 焼かれて粘着性のなくなった粗大な泥の塊が、水に投げ込まれた時に、たやすく溶解するように、そのようにこの大地、この大海とこのスメール山王は巨大な水の集合体に襲われた時、たやすく溶解して消滅する。

L16 地の集合体も消失し、火の集合体も消失し、風の集合体も消失し、ブラフマー神たちの諸住所も消え、ブラフマー神たちの諸宮殿も消滅する。かの業の支配的な力によって結合していたものたちは消え失せる。雨は降り止む。広い、大きな、壮麗できらびやかな、美しい [大] ブラフマー神の宮殿も消滅する。ブラフマー神の世界の領域も。

L17 これが [古の] 法である。

L18 それ (世界) にとって、ここまでが『物的世界の帰滅』(器世界散壊) である。ここままで、20中間劫が [過ぎ去った]⁽⁶⁶⁾。

L19 別のその [後の] 20中間劫のあいだ、この [千世界は] 闇となり、地獄は空虚となり、[上に] 覆蓋がない状態でとどまる。

L20 すべて先と同じ。[水による世界の帰滅は] 火による世界の帰滅の場合と同様である⁽⁶⁷⁾。

L21 1 中間劫は [1 劫である]。すべて先と同じ。

L22 『第三の帰滅』が現れる時がくる⁽⁶⁸⁾。風による帰滅である。

L23 ヴェーハツパラ天 (広果天) から神々が [地に] 降りてきて、姿を隠したまま声を聴かせ、布告を発する：『親しい皆さん、第四禪は不苦不楽です。そこに到達して [その天界に] 住みなさい。』それらの人間たちは [かの神々の] 声を聞いて、強く信じる (信解する)。かの人々は欲望における過患を思惟して、[禪定の] 不苦不楽 [の状態] を寂静に観しながら住し、第四禪を生じさせた後に、命終して、ヴェーハツパラ天に生まれる。

L24 同様に、外道たち(titthakarā)、地獄の者や、地獄の獄卒たち、《p. 219》

水と陸の生き物である畜生や、餓鬼界の者や、アスラたちは、それらの [世界] からこの世界 (人界) へと [転生して] やってきて、欲望における過患を思惟して、不苦不楽 [の状態] を寂靜に觀じながら住し、第四禪を生じさせた後に、[命終して] ヴェーハツパラ天に生まれる。

L25 西ゴーヤーナ洲の人々はその世界で [第四禪を] 生じさせて、[そこからヴェーハツパラ天に行く]。またここで (ジャンプ洲) [ひとまず生まれて、第四禪を] 生じさせる者は [ここから広果天に行く]。

L26 世界が空虚になる時が来る。

L27 ここまでが、『生ける者たちの歸滅』(衆生世界散壞) である。ここまでの、10中間劫が過ぎ去る。

L28 『第二の歸滅』が現れる時が来る⁽⁶⁹⁾。『物的世界の歸滅』(dhātu-saṃvaṭṭani) である。その時激しい風が吹く。

L29 その [時] この大地から、風は手のひら程の大きさの岩石を虚空に吹き上げて粉々に吹き散らす。[さらに] 箕ほどの大きさの [岩石] を、敷物ほどの大きさの [岩石] を、村の田畑ほどの大きさの [岩石] を、虚空に吹き上げて粉々に吹き散らす。

L30 そして巨大な風の集合体 (vāyokhandha) によってかのスメール山王が襲われる時、百ヨージャナの峰峰を風は虚空に吹き上げて粉々に吹き散らす。二百ヨージャナの [峰峰] も、三百ヨージャナの [峰峰] も、四百ヨージャナの [峰峰] も、五百ヨージャナの峰峰も、風は虚空に吹き上げて粉々に吹き散らす。

L31 外のメールの山々における風の元素も荒れ狂う⁽⁷⁰⁾。

L32 水の集合体も、下方にある風の集合体との [繋がり] が断ち切られる⁽⁷¹⁾。

L33 その [風の集合体] はこの大地を虚空に吹き上げて粉々に吹き散らす。

L34 たとえば、力士が [初殻を] 虚空に吹き上げて粉々に吹き散らすであろうように⁽⁷²⁾、まさしくその様に、この大海やスメール山王を、風は虚空に吹き上げて粉々に吹き散らす。

L35 地の集合体も消失し、水の集合体も消失し、火の元素も消失する。ブラフマー神たちの諸住所は消失し、[風は] ブラフマー神たちの諸宮殿を《p. 220》吹き散らす。かの業の支配力によって結合したものは消え失

せる。風は吹き止む。広い、大きな、壮麗できらびやかな、美しく、心を歡ばせる [大] ブラフマー神の宮殿は消失する。[大] ブラフマー神が有する、ブラフマー神の世界の領域も。

L36 [これが] 古の法である。

L37 ここまでが、『物的世界の帰滅』（器世界散壞）である。ここまでの、20 中間劫が過ぎ去った。

L38 別の [その後の] 20 中間劫の時、[この千世界は] 空虚となり、闇となり、[上に] 覆蓋が無い状態で留まる。

L39 すべて先と同じ。風による世界の帰滅は、火による世界の帰滅と水による世界の帰滅の場合と同様である。

『帰滅 (saṃvaṭṭa 大三災)』の章、第15、おわる⁽⁷³⁾。

注

- (1) Śaraṇadeva の文法学書 *Durghaṭavṛtti* の末尾のコロフォンには *iti śrī-mahāmāhopādhyāya-śrī-sarvarakṣita-pratisaṃskṛtāyām śaraṇadeva-viracita-durghaṭavṛttāv aṣṭamādhyāye caturthaḥ pādaḥ // durghaṭavṛttiḥ samāptā //* とあり、また作品の最初の序詩の締め括りに *vākyāc charaṇadevasya chāttrāvagraha-piḍayā / śrī-sarvarakṣitenaiṣā saṃkṣipya pratisaṃskṛtā //* とある。
- (2) Albrecht HANISCH (2008): “Sarvarakṣita’s Maṇicūḍajāṭaka. Reproduction of the Codex Unicus with Diplomatic Transcript and Palaeographic Introduction to the Bhaikṣukī Script”, in: Francesco SFERRA (ed.), *Manuscripta Buddhica I, Sanskrit Texts from Giuseppe Tucci’s Collection, Part I*, Roma, pp. 195-342.
- (3) この Maṇicūḍajāṭaka の発見は、Patna Dharmapada が正量部に属するという水野弘元 (1982) や並川孝義 (1993) や Peter SKILLING (1997) が出した仮説を、言語や文字の観点で裏付ける有力な証拠となり得る。その言語がもつパーリ語との近さは、正量部という部派の故郷が西インドであったらしいことを窺わせるものである。
- (4) この作者の同一性の問題については HANISCH (2008) も論文の1.5節で詳しく証明している。
- (5) 和訳で「……の者たち」とした箇所は、意味不明である。写本には *ayānyānājana* という字が読めるが、*jana* (人々) の前の *ayānyāna-* の綴りの意味が取れない。書き誤りと思われるが、確信をもてる訂正案が今のところ無い。
- (6) 劫という時の長さを説明するために、阿含・ニカーヤ文献には、気が遠くなるような比喩を用いる経がいくつも存在しており、芥子粒の比喩も、それらの経の一つに出てくる。パーリ聖典では相応部の *Sāsapa-sutta* (SN, II, 182) がそれにあたり、漢訳阿含では、雑阿含経卷第三十四 T2 242b (948経) と別訳雑阿含経卷第十六 T2 487c (341経)

と増一阿含経巻五十 T2 825b (3経) がそれにあたる。MSK の作者サルヴァラクシタがここで芥子粒の比喻による説明だけをして、阿含・ニカーヤにあるほかの、盤石の摩耗等の比喻を示さないのは、彼が文献Xに基づいて詩節を作ったからであろう。文献X §§219-220 でも芥子粒の比喻のみが出てくる。さてこの MSK と文献Xに見られる正量部の伝承では、劫 (中間劫) と大劫 (成住壞空の四期の一周期) の両者の時量を別々に、芥子粒の比喻を使って説明している点が特徴的である。阿含経形成の時代には未だ問題にならなかった劫と大劫の違いが、アビダルマ形成の時代になると問題になったため、新たに大劫についても阿含経のように芥子粒で説明する必要が生じた。劫と大劫の違いを意識して、大劫の時量を芥子粒で説明している文献としては、この MSK と文献Xの他には、大智度論巻三十八 T25 339b の記事がある。それによれば百由旬の城から百年ごとに一粒の芥子を取り去り、そのようにしてすべての芥子粒が尽きても、まだ大劫は尽きていないという。大智度論によるこの大劫の時量の説明は、MSK 6.1.6 にかなり似ている。(なお大智度論では巻五 T25 100c にも劫の説明があるが、その箇所では羅什は「百由旬」の表現を「四千里」という表現に言い替えているので、ここで羅什は一由旬を四十里として計算して訳したことがわかる。この羅什の計算は、羅什の弟子の僧肇が『注維摩詰經』巻六で「小由旬四十里也」(T38 382a) と記していることから確かめられる。) パーリ相应部や漢訳阿含の記述では、どれも劫を「一由旬」の城や盤石で説明するが、大智度論で大劫を「百由旬」の城に変えているわけは、劫と大劫の量の違いを明確に区別する必要が出てきて、大劫の方の数字を100倍に増やす必要が出てきたからであろう。なお MSK と文献Xで、一中間劫の比喻に用いられる都城を一辺2クローシャ (1 gavyūti = 2 krośa) と伝え、一大劫のほうの都城を一辺1ヨーjana (由旬) と伝えることは、他の部派の伝承には見られない独特の記述である。もともと阿含聖典では中間劫と大劫を区別することなく「劫は一辺が1ヨーjanaの都城」と伝えていたため、ある時代に正量部のアビダルマ論師により、阿含聖典の劫とは大劫の意味である、と規定がなされて、さらに「大劫が一辺1ヨーjanaの都城ならば、中間劫は一辺が何ヨーjanaの都城か」という計算がなされたのであろう。1ヨーjanaは梵語辞書などが示す一般的定義では4クローシャにあたりとされるが、俱舍論世間品偈頌 88a によれば1ヨーjanaは8クローシャにあたる。後者の俱舍論の伝承に基づけば、大劫の都城の体積は8の三乗の512で、中間劫の都城の体積は2の三乗の8になる。つまり大劫の都城の体積は中間劫の都城の体積の64倍になる(!)。この64倍という数字は、64中間劫が1大劫である、という計算が裏側で働いたことを示している。厳密に言えば正量部は1大劫を60中間劫と見ているはずであるが、恐らく古い時代に異説として1大劫を64中間劫とみなす意見があり(この意見は後に姿を変えて大三災の64転一周期の理論になる)、その意見が正量部に中間劫の都城を一辺2クローシャと見なす意見を作り上げたのであろう。**【部派の相違点1】**

- (7) ここで「全く同一の輪転の規則を有するものが」と訳した原文は sa eva bhramaṇavidhir である。しかし vidhi には創造主の意味もあるので、「[以前と] 同じ、かの輪転の創造主が」と解釈する可能性もある。輪転の創造主とは大梵天 Mahābrahmā であり、

- 大劫は梵天の誕生から再開始され、あらゆる生類の誕生はその後になるので、そのように解釈しても無理はない。
- (8) 先のドイツ語版 OKANO (1998) では写本どおり bhavane と読んで「家、在家生活」の意味にとったが、ここでは *bhuvane と訂正して解釈した。すると pāda d の asya tīram は, bhuvanasya tīram の意味になり、「生存（つまり輪廻）の彼岸に」と訳せる。
- (9) 第二禪は定より生ずる喜と楽とがある状態であるが、第三禪においては喜を捨離する。聖典の決まり文句では第三禪は「喜を離れることより、捨に住し、正念正知にして、身に楽を感受し、諸の聖者が『これ捨にして、正念ある楽住なり』と宣説する第三禪を具足して住す。」と定義される。平川彰 (1997) : 『法と縁起』春秋社、381-384頁。
- (10) この遍淨天の語は、MSK 梵文写本では sukhākḥilākhyam となっているが、śukha の語を śubha に代えて、*śubhākḥilākhyam と訂正して読んだほうが、有部などの他の部派の伝承と合致する。ただし遍淨天という名の説明については俱舍論世間品第3頌の称友疏 (ed. ŚĀSTRĪ, p.382) に「意地に属する楽が淨といわれる」(manobhūmikaṃ sukhaṃ śubhaṃ ity ucyate) と説かれ、また立世論にも「云何第三名曰遍淨。是名受樂遍滿」(T32, 198b18-20) とあって、これらの伝統的解釈によれば「淨」śubha は第三禪で味わう「楽」sukha の意味であるため、śubha は sukha の同義語とみなされて、それ故正量部では sukhākḥila という語形の遍淨天の別名が使われていた可能性もないではない。ただし他の正量部文献ではその可能性は支持されず、有為無為決択の第20章の正量部の教義においては dge rgyas kyi lha rnam (= *śubha-kṛtsnāḥ) の語が使われているし (北京版 153b8)、また Loka-p も subhakiṅhā という語形を示し、漢訳の立世論も「遍淨」と訳す。そのため、MSK の梵文を *śubhākḥilākhyam と訂正する。
- (11) この正量部の伝承は七つの月の出現で水災を説明する。阿含・ニカーヤ文献の『七日経』においては終末に火災を起こす七つの太陽が出るという記述しか無く、水災には言及しないので、火災から類推を働かせて、水災における七つの月の出現という固有の説明の仕方が正量部系の伝承として出てきたものと思われる。他部派でこのような説明の仕方をするものは無い。【部派的相違点2】この MSK6.2.2以外に、文献 X §212 においても「その後、そこに（二禪天に）七つの月が出現する。出現した月を原因として、水があまねく至る所で増大し、第二禪天が完全に滅びる。」と記されており、水災が月を原因として起こる、という正量部の伝承を確認できる。ただし Loka-p の記述 (DENIS, I, pp. 217-218 ; 本論文後述の L10-15) は、七つの月に全く言及しないで、数万年続く大雨が大洪水を作ってスメール山を溶かし、世界を滅ぼすと説く。この点で MSK と文献 X の正量部伝承が Loka-p の伝承と合致していないので、注意される。Loka-p は正量部が犢子部から未だ分出していない時代から受け継がれた通上座部的な阿含的な伝承を多く含む古いアピダルマ文献であり、MSK と文献 X は正量部の意見が固まった新しい時代のアピダルマ的な伝承に基づいているので、部派の相違というよりはむしろ成立年代の違いがここに出ているのであろう。月が七つ出たため世界を滅ぼすほどの大洪水が起こるといのは、海とは昇る月に引かれるものだ、という潮の満ち干の観察と関係しているのであろうが (cf. Kathāsaritsāgara 3.2.73; 6.5.29)、

またインドの古来よりの神話的思考における、月をソーマ、乳、雨と見なす伝承とも関わっていると思われ、特に月と雨水との密接な関係は、初期ウパニシャッドの五火二道説における月と雨の関係にも指摘できる。またインド以外の世界の諸民族の神話における月と洪水との関係については、山口昌男（1986）：『河童のコスモロジー』、講談社学術文庫、166頁に詳しい。さて有部の大毘婆沙論卷百三十三を見ると、水災が起こる時に、水は一体どこから湧き出るのが問題として立てられ、解答の可能性として三つの説が示されている（T27 690a25-b1）。第一の説は、第三禪の天界（遍淨天）から熱灰水の雨が降り、その世界から下の第二禪極光淨天の世界へ、さらにその下へと水が落ちて浸し広がってゆくという説で、「上から下への漸次破壊説」というべきものである。第二の説は、下の水輪から水が湧出するという説で、これは水が水輪から地輪が上がってゆき終には第三禪天を頂としてそれに至るまでの一切を破壊する「下から上への漸次破壊説」というべきものである。第三の説は、如是説者の説（毘婆沙師が正統と見なす説）で、近処つまり私たちが住む地上世界から、水が起って、それによって第二禪天までの全世界が滅ぶという説である。この第三説を大毘婆沙論は「近処に随ひて、災水の生ずること有り、彼の因縁に由りて世界は便ち壞するなり」（T27 690a29-b1 隨於近處有災水生、由彼因縁世界便壞）と説く。同じその第三説を順正理論も「決定の義」つまり正統説と記して、水が「即ち此の邊より生ず」と表現する（T29 526c18; 阿毘達磨藏頭宗論 T29 859a7 も同様）。この第三説は「地上世界のいたる処で増水して起こる説」というべきもので、その説は、「水があまねく至る所で増大し、第二禪天が完全に滅びる」という正量部の主張（文獻X §212）とよく似ている。この毘婆沙師の正統説である第三説を、俱舍論の著者世親はわざと取らなかった可能性がある。「雨水によって、水の帰滅がある」（varṣodakenāpsamvartani）」と彼は俱舍論世間品100頌釈に記しているからである（*Abhidharmakośa*, ed. PRADHAN, p. 189; ed. ŚĀSTRĪ, p. 558）。さて上記の大毘婆沙論が示す第一の説と第二の説は、毘婆沙師以外の説を指している可能性があるので、実際に有部以外の他の部派が水災に対してどのような説明を伝承しているかを見よう。パーリ上座部の清淨道論によれば、まず大雲が発生してアルカリ水（灰水 *khārūdaka*）を雨降らし、雨は細雨から激しい水流に変わってゆき、地上の一兆の鉄圍山世界をすべて水没させてから、次第に水位を天界にまで上げていって、第三禪天を頂としてそれより下の梵天界を水没させて完全に破壊してから、水は自ら消え、虚空だけが残される（*Visuddhimagga*, ed. WARREN, pp. 354-355; 『南伝大蔵経』第63巻393-394頁）。降雨が次第に強くなり大水流となり、やがて下から上に向かって水による破壊が上がってゆくという破壊の過程が説かれる。これは「下から上への漸次破壊説」とも見なしうるが、ただし降雨は地上世界から始まる。これはタイの三界経 *Traibhūmikathā* でも同じである（REYNOLDS (1982), pp. 311-312）。ちなみに水がどうして横に流れずに垂直に天界まで水位を上げられるのかについては、清淨道論は四方からの風が水を支えるから、という説明をする。これに対して、逆の立場の「上から下への漸次破壊説」ともいえるのが、法蔵部の漢訳長阿含の世記経の説く水災の伝承である。世記経三災品によれば、水災の時には遍淨天の神々の世界が

ら熱水による消滅が始まり、上から下の世界に向かって、順次に熱水で煮つめられて溶けて滅んでゆく。(1) 遍淨天 (2) 光音天 (3) 梵迦夷天 (4) 他化自在天と化自在天と兜率天と炎摩天 (5) 須彌山と四天下 (6) 大地・水輪・風輪の消失、という六段階で、破壊の過程が説かれる (T1 140a9-29)。世記経によれば、劫の初めと終わりの時には例外的に雲が光音天まで上昇するという (T1 136c28)。光音天まで昇ったその雲が大雨を降らせるのであろう。また世記経の同系の並行文献である起世経 T1 357b-c や起世因本経 T1 412b-c や大樓炭経 T1 304c を見てみると、世記経の六段階の如くに細かく分けて記述することをしていないが、大体は同様の説である。最後に大乘經典を見てみると、大宝積経 (16) 菩薩見実会 (Pitāputrasamāgama) の六界差別品に水災の記述があり、三十二重の雲が三千大千世界を覆い、五中間劫の間大雨を降らし、さらに再び五中間劫の間大雨を降らして、終には上は梵天に至るまで水が積み満ちると説かれる (T11 415b25-c1)。類似する記事は並行文献としての父子合集經にもある (T11 965a8-11)。その水災の記述はパーリ上座部と同様に「下から上への漸次破壊説」といえるであろう。

- (12) 第三禪はすでに喜を離れているがまだ身体的な楽や苦が残っている。そこで第四禪に入る時にはさらに楽や苦を捨てて、不苦不楽となる。聖典の決まり文句では第四禪は「楽を捨て苦を断ずることより、さきにすでに喜と憂とを滅したるが故に、不苦不楽にして、捨による念の清淨なる第四禪を具足して住す。」と定義される。平川彰 (1997) : 『法と縁起』春秋社、381-384頁。
- (13) 先の水災の説明の仕方において、第一説の「天界の最上辺から下へ向かったの破壊説」と第二説の「真下の水輪から上へ向かったの破壊説」と第三説の「地上世界のいたる処で増水による破壊説」という三様の説明があったように、この風災の説明の仕方についても、有部の大毘婆沙論卷百三十三に、風災の時に風はどこから生じるのか、という問題設定があり、そこで水災と同様の三様の説明をする (T27 690b2-9)。第一説では、第四禪天の広果天から大風が起こって破壊すると説き、第二説では下方の風輪から猛風が起こって破壊すると説き、第三説では、「近処に隨いて災風の生ずること有り」、つまり地上世界のあらゆる場所から災としての風が発生することにより、それによって広果天より下の全世界が滅ぶと説く。この第三説が如是説者つまり毘婆沙師の正統説である。同じ三つの説は順正理論 (T29 526c18-20) にも阿毘達磨藏顯宗論 (T29 859a7-9) にも説かれる。さて第一説と第二説は有部以外の部派説である可能性もあるので、実際に有部以外の部派の伝承を見てみよう。パーリ上座部の清淨道論では、風災の時に地上の風が強くなり徐々に猛烈になって大暴風となる様子が説かれ、地上の一兆の鉄圍山世界がすべて暴風によって破壊されてから、次第に風の破壊は天界にまで及び、第四禪天より下にあるすべての天界を破壊され尽した後、風は自ら消えて、何も無い虚空だけが残されるという (*Visuddhimagga*, ed. WARREN, p. 355; 『南伝大蔵經』第63巻394-395頁)。これは「地上世界から始まる破壊説」といえるであろう。上の三つの説の中では第三説にあたると思われる。正量部の *Loka-p*, L29-30 に見られる記述も、やはりこの第三説の立場と思われる。他方、法蔵部の長阿含世記経では、風災

では上の世界から順に滅んでゆくと思なされている（水災の場合と同様）。そこでは（1）果実天（2）遍淨天と光音天（3）梵迦夷天と他化自在天（4）化自在天と兜率天と炎摩天（5）須彌山と四天下（6）大地・水輪・風輪の消失、という順序で六段階に分けて破壊の過程が説かれる（T1 140c6-141a2）。これにより、第一説の「世界の最上辺から下へ向かっての破壊説」は法蔵部の説であったことがわかる。このように小乗の伝承は部派ごとに風災の説明の仕方が水災同様はかなり違うことがわかる。【部派的相違点3】 このように部派間で見解が分かれるわけは、諸部派が共有する阿含・ニカーヤの伝承では火災しか經典に述べられていなかったのに、諸部派が分立したアビダルマの時代になって、水災と風災を加える必要が出てきたため、部派ごとにまちまちの説明の仕方が生じてしまったためであろう。長阿含『世記經』の水災や風災の記事は、基本的に阿含の『七日經』における火災の説明の文章を出来る限り踏襲して、同じスタイルを保ったままで反復しながら、その中に水災と水災の固有の説明を入れ込んで出来たものである。つまり文体としてはアビダルマ的ではなく阿含・ニカーヤ的であり、『世記經』が阿含とアビダルマの中間に立つ、過渡的な文献であることを示す。有部の『施設論』中の『世間施設』もそのような中間的な性格をもつが、文献の位置づけとしてはアビダルマである。この小乗諸部派のアビダルマ形成の時代は、ヒンドゥー教徒のマハーバーラタ形成の時代と重なるため、仏教諸部派のアビダルマの大三災の記述は、マハーバーラタ第186章56-76詩節（上村勝彦訳『原典訳マハーバーラタ4』、44-45頁）に見られる世界終末時の火災 水災 風災という順序の世界破壊の記述とほぼ同時代的な関係にある。最後に大乘經典の伝承を確認すると、大宝積經（16）菩薩見実会（Piṭāputrasamāgama）の六界差別品にある風災の記述では、「葉を落とし、枝條を折り、樹を折り、根を抜き、山峯を崩摧し、大山を倒壊し、破析し分段し、漸次に散壞して乃ち微塵に至る」と説かれ（T11 416b21-23）、地上の風が徐々に強くなって行って終に三千大千世界が完全に微塵となって消失する様子が説かれる。この説は大毘婆沙論の第三説の「近処に隨いて災風の生ずること有り」という地上世界からの破壊説に近いというべきである。大乘經典としてはこの他に大乘菩薩藏正法經（大正 No. 316）の風災の記述もあるが、そこでは大風が三千大千世界を吹撃して、一挙に粉碎して微塵にすることが説かれる（T11 801a10-25）。

- (14) 大地の下に水があり、その水は風の上であり、その風は虚空の上にあるという見解が、増支部8集70（AN, IV, 312; 南伝21巻261頁）における、地震の原因の説明に見られる。これは水輪と風輪が虚空の上にある、という器世界のアビダルマ的説明の源泉となる阿含・ニカーヤ資料の一つの記述である。MSKの本詩節6.2.4で出てくる「地・火・水の集積体」（bhūmy-agni-vāri-nidhaya）のうち、地と水の集積体についてはその記述に従って理解できるが、しかし火の集積体（agni-nidhi）とは何を意味するのか不明となる。むしろ器世界に存在するあらゆる火の元素が集まって集合体になる時が帰滅の最後の時に起きると理解するべきであろうか。Loka-pにも、器世界の帰滅の時に火の集合体が在って、消滅することを説く文が見られる。「地の集合体も消失し、火の集合体も消失し、風の集合体も消失する」という文がLoka-pに繰り返して出てくる（本稿の

L16)。その箇所でも地の集合体 (pathavi-khanda) と風の集合体 (vāyokhanda) という言葉は、それぞれ有部アビダルマという金輪と風輪を意味していると理解できるが、しかし火の集合体 (tejokhanda) の意味が不明となる。正量部が火輪の存在を認めていたとは到底思えないので、器世界が解体されてゆく時に、一時的に四元素がそれぞれ集合体をなしてから、個別に順に完全に消滅してゆくのではないだろうか。するとこれはかなり独自性のある部派の見解であることになる。【部派的相違点4】興味深いことに、パーリの註釈書アッタサーリニー第4章に伝わる、宇宙論に関する一連の韻文も、火災・水災・風災による百千俱底の世界の消滅を述べたあと、地界の破壊・水界の破壊・火界の破壊・風界の破壊を述べている (Aṭṭhasālinī, ed. BAPAT, p. 243; 佐々木現順 (1960): 『仏教心理学の研究』、508-509頁)。この一連の韻文は恐らく正量部と同じ見解に立っていると思われる (正量部の宇宙論から借用した韻文かもしれない)。この地界・水界・火界・風界の四界の破壊という考え方の起源を遡ると、仏教以前のタイティリヤ・ウパニシャッド (2.1) に見られる、梵 brahman 虚空 ākāśa 風 vāyu 火 agni 水 ap 地 pṛthivī 蔬菜 ośadhi 食物 anna 人間 puruṣa という宇宙の形成順序の思想に近いものが、初期仏教の宇宙観の中に基本構想として入って、仏教の世界生成観の根底にあったとすれば、その虚空 風 火 水 地という五段階の、五層から成る宇宙観の構想が、成劫ではなく滅劫の時の記述に、逆さまの順序で出てくるのかも知れない。つまり成劫の時は虚空の上に風 水 地という順で成層を作ってゆくが、滅劫の時は少し違って、地の集合体・水の集合体・火の集合体・風の集合体がそれぞれ元素の集合体として形成されてから順次に消滅し、最後に虚空のみが残ることになる。

- (15) 火災・水災・風災の三種の世界破壊は、俱舍論によれば同じ頻度で繰り返し起こるのではなく、火災が最も頻繁に起こる。水災は火災が7回起こった後の8回目に1回現れるにすぎず、その後はまた火災が7回繰り返される。さらに風災は水災がそのようにして合計7回起こった後さらに火災が7回繰り返された後に、ようやく1回現れるだけなので、風災の出現は64回の世界破壊に1回起こるだけになる。この大三災の異なる周期については俱舍論世間品102頌を参照。パーリの清浄道論 (ed. WARREN, p. 356, §65) も同意見である。ただし正量部が同じ意見を有したかどうかは明らかではない。この MSK 6.2.5 の pāda a をそのまま読むと、大劫すなわち一回の成住壞空の周期のたびに、大三災のどれかが出現するというより、三種全部が出現する、という教義を正量部が有していた可能性が感じられる。
- (16) 本詩節 6.2.5 は大三災 (火水風による世界の破壊運動) によって我々の生きる一輪岡山世界 (サハー世界) のみならず同時に「他の諸世界」も滅びる、と述べている。正量部では一千世界 (大千世界ではなく小千世界) を範囲とする生成と破壊の運動の周期を一大劫として考えていたように思われる。岡野 (2009)、19-22頁の注21を参照。
- (17) この「[あらゆる] 形成物 (有為法) は恒常ではない」(asti na saṃskṛtaṃ dhruvaṃ) という文は、MSK 5.2.8 の「他の、有為法に属するすべてのものも、どうして恒常でありえようか」(kiṃ syād dhruvaṃ saṃskṛta-jātaṃ anyat) の文や、5.4.2 の「この一切は恒

常ではない」(adhruvaṃ sarvam idam) という文と関連しており、それは MSK の第 5 章第 2 節ならびに第 4 節の二つの節全体の内容と繋がり合う。この文が MSK という作品の中心的な主題であると見なしうが、もともと聖典に遡る文である。増支部の七日経では、「比丘たちよ、諸行は (saṃkhārā) 無常であり、諸行は恒常ではなく、諸行は安心して頼れるものではない」という文で始まる定型的な文が 6 回繰り返されて強調される (AN, V, pp. 100-103)。その七日経の既述がより発達した形を示す世記経の三災品 (T1 137b-141a) では、その定型文が章全体で 23 回も繰り返されるようになる。この世記経の例から、七日経に由来する定型文が後世に発達した宇宙論文献でも世界破壊の記述において頻出するようになったことがわかるが、正量部では文献 X を経て MSK という新出の宇宙論においても作品の基調・主導動機としてその定型文が使われ、そして MSK の宇宙論全部を締め括る本詩節において、その定型文の一部が示され、それが釈尊の教えである、と念押しされる。

(18) 本詩節 6.2.5 全体が文献 X §217 (韻文) と内容がよく対応することは注意される。

(19) 本詩節 6.3.1 の内容は、釈尊が (A) 「それ (世界) に因あること」、(B) 「まやかしてあること」、(C) 「前から有るのではないこと」の三つの正しい立場を説くことで、外道が説く (*A) 「無因論」、(*B) 「シヴァ神原因論」、(*C) 「有の常在論」の三つの誤った立場を論駁した、と理解できる。原文をあげると、次の通りである：

karmādhīhetukathanāj jagato jītāris taddhetutām anrjūtām apurāstitāṃ ca /
śāsann ahetuśivahetusadāstivādān prākkoṭikān kuṅgaṇinām akarod asārān //

本詩節の pāda b で (A) 「それ (世界) に因あること」(tad-dhetutā)、(B) 「まやかしてあること」(anrjūtā)、(C) 「前から有るのではないこと」(apurāstitā) の三つの立場が仏教説として説かれ、次に pāda c で (*A) 「無因論」(ahetu-)、(*B) 「シヴァ神原因論」(śivahetu-)、(*C) 「有の常在論」(sadāstivāda) の誤った三つの立場が説かれている。それぞれの立場の対応関係を考えてみると、(A) と (*A) が組になるのは間違いのないし、(C) と (*C) が組になるのも妥当であろう。しかし (B) と (*B) を組にしてよいのかどうかは、かなり難しい判断を要求される。(B) 「まやかしてあること」(anrjūtā) は素直に訳せば「正直 (rju) ではないこと」である。世界が知覚者を欺そうとしていない、という立場が、世界が「正直であること」であるという意味であるとすれば、逆の、世界が知覚者を欺しているとする「世界幻影論」が、この (B) 「正直ではないこと」という立場になるのであろうか。しかし「世界幻影論」を仏陀が正しい見解として説いたとすれば、おかしなことになる。なぜなら MSK 1.4.6 で「知覚迷妄論」と呼ぶべき外道の立場が説かれているが、仏陀はそれを誤った見解とみなして、MSK 1.4.10 で反論しているからである。この (B) が「世界は知覚者を欺そうとする幻影ではない (世界は正直である)」という主張の立場であるとすれば、それは果たして (*B) 「シヴァ神原因論」と組になる意見であろうか。もしどうしても (*B) 「シヴァ神原因論」の真逆の見解が (B) でなければならぬとすると、それは「シヴァ神無原因論」つまり「世界に主宰神の存在を認めない論」(非主宰神論) になるはずである。従って、(B) 「まやかしてあること」(anrjūtā) という語の解釈は、むしろ非主宰神論の意見と

理解できるようにかなり強引に解釈にする必要が出てくる。さて、この MSK 6.3.1 の詩節の理解のためには、MSK の 1.4.4 から 1.4.10 までの箇所の哲学的内容が最も参考になるし、そこの記述と出来るだけ結びつけて解釈すべきかも知れない。その MSK 1 章 4 節には外道の四つの立場と、それに対する釈尊の四つの反駁が説かれる：MSK 1.4.4 と 1.4.8 は無原因の自然発生論とそれに対する反駁であり、1.4.3 と 1.4.7 は主宰神による創造論とその反駁であり、1.4.5 と 1.4.9 は有の常住論とその反駁であり、1.4.6 と 1.4.10 は世界の知覚は迷妄にすぎぬとする迷妄論とそれに対する反駁である。このように MSK の 1 章 4 節の箇所には外道の四つの立場が説かれているが、この MSK 6.3.1 の詩節には、韻律の制約上か、外道の三つの立場しか説かれていないために、両方の箇所の記述の対応関係が明確ではない憾みがある。本詩節 6.3.1 の (*A) は MSK 1.4.4 に説かれる自然の *niyama* による無原因発生論 *svabhāvavāda* (or *ahetuvāda*) と、(*B) は MSK 1.4.3 に説かれる主宰神による創造論 *īśvarakāraṇavāda* と、(*C) は 1.4.5 に説かれる有の常住論 *śāśvatavāda* と明らかに関係しているので、すると (A) は MSK 1.4.8 (自然発生論への反駁) と、(B) は 1.4.7 (創造論への反駁) と、(C) は 1.4.9 (有の常住論への反駁) と、内容的に対応することになる。(B) が MSK 1.4.7 と対応するならば、1.4.7 の詩節に「まやかしてであること」(*anṛjūtā*) という語の意味を説明する表現があるはずであるが、しかしそれが見つからない。決定的な判断を下すために有力な別の資料が見つかるまで、今のところは本詩節の (B) と (*B) を組にすべきかどうかの判断は、保留にした方がよいかもしれない。

- (20)「業という初めの原因の法話」(*karmādihetu-kathana*) は、世界の前際に関する議論 (宇宙の始まりに関する論議) とみなすことができるので、「前際 (宇宙の過去) の [諸見解] を」と訳した。その原語は *prāk-koṭīkān* である。その語を *pūrvapakṣa* の意味に取って「前宗 (後から反駁されるべき意見) [の諸見解] を」と訳す可能性もある (和訳に先行するドイツ語訳で私はそのように訳した)。
- (21) 本詩節 6.3.2 後半の「この太陽は東方の闇を駆逐して、どうして西方の闇の集まりを追い払わないことがあるか」という文について、東方の闇は宇宙の過去に関する誤った諸見解、西方の闇は宇宙の未来に関する誤った諸見解を指すものと私は解釈した。先の詩節 6.3.1 で外道たちの宇宙の過去 (前際) の諸見解が話題になったので、本詩節 6.3.2 では宇宙の未来 (後際) に関する諸見解が話題になる。釈尊は大三災を説くことで、外道たちの誤った未来の宇宙終末論の見解を退けた、と理解できる。この解釈にあわせて、「彼ら [外道の] 諸説としての未来の出来事を (*aparānta-vṛttān*) 退けた」と *pāda b* を訳したが、その原文は *vādān apāsyad atha tān aparānta-vṛttān* である。私は先行するドイツ語訳では「未来の (*aparānta-*)、そして過去に起こった (*vṛttān*) [外道の] 諸説を退けた」と解釈して、そのようにドイツ語に訳したが、今回のこの和訳では違った解釈を提示してみた。(ここで *aparānta-vṛttān* の複合語の解釈をどうするかは、前詩節 *pāda d* にある *prākkoṭīkān* の語の解釈をどうするかという問題と連動している。) なお、外道の様々な誤った見解として、パーリ長部『梵網経』(DN 1, *Brahmajālasutta*) に出てくる六十二見は、「過去に関する説」*pubbantakappika* と「未来に関する説」

aparantikappika に大別される。「過去に関する説」とは、常住論・一部常住論・有限無限論・詭弁論・無因生論であり、「未来に関する説」とは、死後に関する説（有想論・無想論・非有想非無想論）・断滅論・現法涅槃論である。宇井伯寿（1965）：『印度哲学研究 第三』、207頁及び浪花宣明（1998）：『サーラサンガハの研究』、295頁を参照。外道たちの未来と過去に関する見解（aparānta-vṛttān）は、このような『梵網経』の文脈から解釈する可能性もある。しかし釈尊が火水風の大三災の教えを説くことで、死後に関する説・断滅論・現法涅槃論などの「未来に関する説」を破した、ということになると、それでは意味としておかしい。あえて『梵網経』の過去説・未来説の説明を本詩節の aparānta-vṛttān の解釈に無理にあてはめないことにする。

(22) 本詩節6.3.3も、正量部の聖典の何らかの記述に基づいていると思われるため、その聖典なくして確実な理解は難しいが、一応次のように意味を推しはかることが出来よう。仏は、燃烧（dahana）・灌注（secana）・震動（kampana）などのような合目的な行為、それぞれの目的に従った行為（arthakriyā）が、全世界に見られることを説くことで、世界など存在しないという虚無論を説く外道の見解を斥けた。燃烧とは火の、灌注とは水の、震動とは風あるいは地の、それぞれの元素の動きを示していると解釈することが出来るし、また前詩節 6.3.2 が言及する火・水・風の大三災に関する釈尊による説法と関連させてこれを理解することも出来る。つまり釈尊は、大三災の教えにより、世界における地水火風の元素がそれぞれ目的ある活動を果たすことで全世界の形成・破壊がなされることを説示し、その教えにより、この世界の何物も、地水火風も実在しないという、虚無説 nāstivāda を説く外道の見解を斥けた、と理解できる。その外道説は断滅論 ucchedavāda の一種として、地水火風の実在すら疑い、否定する、不可知論的二ヒリズムの立場のローカーヤタの見解であると推測される。金倉円照（1971）：『インドの自然哲学』、304-310頁を参照。MSK の 6 章 3 節の冒頭の、以上の三つの詩節は外道説の批判にあてられている。

(23) 本詩節6.3.4は釈尊による見道の説示を説明する。苦（duḥkha）・原因（hetu）・解脱（mokṣa）・道（mārga）とは、苦集滅道の四聖諦を意味する。釈尊は四聖諦を弟子たちに示し、見道所断のあらゆる煩惱（akḥila-darśana-heya）を断ずるために、それらの煩惱が断られた寂靜なる境地（見道所断の煩惱をすべて断ち尽くした境地）を示した。アビダルマによれば、すべての煩惱は見道所断と修道所断に分類されるが、そのうち見道所断の煩惱には、苦の真理で断ち切れるもの・集の真理で断ち切れるもの・滅の真理で断ち切れるもの・道の真理で断ち切れるもの、の四種類があり、四つの真理の現観によってそれら四種類すべてが断ち切られる。修道所断については次の詩節で述べる。

(24) 本詩節6.3.5は釈尊による修道と無学道の説示を説明する。仏は修道所断の煩惱を断じするために、見道の後に修道の位を説いた。さらにまた無学の境地が一切の煩惱を立つために修せられるべきことを説いた。前詩節の見道が預流向にあたり、その後預流果・一來向・一來果・不還向・不還果・阿羅漢向の六段階から成る修道が続き、ここまでが有学道である。その後あらゆる貪欲が滅した、仏道修行が完成した境地である阿羅

漢果つまり無学道にいたる。

- (25) 第2章第1節から第6章第3節までのすべての仏教宇宙論に関する法話 (kathā) は、釈尊の説法という枠の中に置かれていた。説法を終えて再び枠組に戻ってきたことがこの第6章第4節の冒頭でわかる。
- (26) kalākala は辞書に無いが、kala (甘みな音を発する) の強調形の形容詞とみて、「とても甘みな響きを発する」と訳した。carācara, calācala あるいは ghanāghana などの語と類似する造語。RENOU (1975), §87 c), §147 を参照。あるいは kalakala 「ブーンと唸る音、活気にざわめく音」という名詞の派生語の形容詞ともみなしうる。なお本詩節の kalākalākālā と hasāhasāhasā という音は笑いのオノマトペ (擬音語) として、ここで言葉遊びに使われている。日本語の「カラカラ (と笑う)」「ハッハッハ (と笑う)」にあたる。仏教梵語の hikkāra, hakkāra の語も擬音語である。また本詩節の dharādharādharā と raṇāraṇāraṇā もここで大地が地震を起こして「ごろごろ」と鳴り、「らんらん、りんりん」と鳴り響く音を模している。このようなオノマトペ的な yamaka の技法が見事である。
- (27) asaha+sāhasa+āhasa と分解し「耐えられない激しい笑い」と訳す。āhasa は R. SCHMIDT の辞書では「軽い笑い」(leises Lachen) であるが、ā-を「軽い」と訳す必要はなく、「笑い、笑い出すこと」の意味に取る。
- (28) 本詩節6.4.1 abは Śākyasiṃhajātaka, 59 ab の tatas **cakampe sadharādharā dharā** velāṃ vyatītya prasasāra sāgaraḥ という句 (M. HAHN (2007), *Editio Minor*, p. 162) と表現が類似する。またその Śākyasiṃhajātaka の同じ詩節の後半 59 cd saṃsaktamandrās-ayasaumyanisvanāḥ divaukasāṃ dundubhayaḥ prasasvanuḥ // の句も、MSK 1.3.15 bc の **devadundubhinisvanaiḥ** / nanartāmbudhivastrā bhūś の句と表現が似ている。このほか Śākyasiṃhajātaka と表現が類似する箇所は、MSK 6.4.8 a や1.2.24 ab でも指摘できる。このような MSK と類似する箇所は Śākyasiṃhajātaka の後半部分——1190年以前に前半部分 (チベット訳もある) がインドで成立した後に恐らくネパールで付加増広された部分——に見つかるので、その付加増広部分が作られる時に MSK の詩節がその作成過程で想起されて模倣されたと推測される。このような模倣は、MSK という作品がネパールの学識ある仏教徒に文学的な手本として高く評価されつつ読まれていたことを物語る。
- (29) 本詩節6.4.2の utprekṣā (非現実的状況の描写) の意味は次のように理解される。海は仏の説法を讃歎するため、激しい波の音によって高い称賛の声をあげ、また海中に住むアスラの群の輝きにより、底なし (ādhinā vinā) の海の有様は、星が瞬き始めた天空に負けないほどに、美しかった。本詩節ではアスラたちが海底で美しい光を発していることが語られている。聖伝文献 Viṣṇupurāṇa II 5 等に見られるヒンドゥー教の世界観では、アスラたち (= daitya, dānava) は通常地下世界 Pātāla に住んでいるとされるが、仏教文献の様々な記事では、通常アスラたちは海に住んでいると見なされている。例えば長部経典 DN 20, Mahāsamaya-sutta は「金剛杵を手を持つ [インドラ] に敗北したアスラたちは海に住む (jitā vajirahatthena samuddaṃ asurā sitā, PTS ed., DN II, p.

259)」と説く。アスラの住処についてかなり詳しく述べている小乗文献として漢訳大蔵経には世記経・起世経・起世因本経・大樓炭経や正法念処経などがあり、望月仏教大辞典の「阿修羅」の項 (32-33頁) に詳しくその住処の問題も扱われている。正法念処経による阿修羅の記述については、LIN Li-Kouang 林藜光 (1949): *L'Aide-mémoire de la vraie Loi (Saddharma-smṛtyupasthāna-sūtra)*, Paris, p. 24 を参照。それらの記述から仏教徒がアスラの住処として須弥山の近くの海底かまたは海の地下深くを想像していたことが確かめられる。

- (30) 難しい詩節なので私の理解を以下に説明する。「アムリタ (甘露) を食する者」(amṛtabhojana) とは神々を意味する。「とても濃厚な食事」(ghanāghanāśa) の語は、アムリタと同格関係と取り、そのように訳したが、また「インドラ神の領域 [にある]」あるいは「厚い雲の領域 [にある]」(ghanāghanāśā) という意味にも取れる。「風を食する者」(pavanāśana) とは蛇のことである。神々の働きかけによって、また風が吹くことによって、雲が動かされ、徐々にゆっくりと (śanair) 太陽を覆っていた雲が立ち去ると、すぐに (āśu) 美しい太陽の輝きが出た、とこの詩節は解釈できる。風を食べる蛇は風を追いかけてゆくので、風と一緒に連れ立って去るのであろう。輝き (bhā) 無衣にされた (a-veśā vihitā) とは、覆うものを失い丸裸になった、つまり露わになった、と解釈した。
- (31) 神々とアスラ族 (dānava) の間の相互の憎悪が、「[並行して] 同一の順序次第で (krame same) 集積し増大した (sameta) 新しい (nava) 憎悪」である。ここでは「同じ歩調 (テンポ) で高まり来た最近の敵意」と訳した。「インドラ神のいる (sa-vāsavā)、輝きをもつ (sa-bhā) 集会場 (sabhā)」とは、Sudharmā という三十三天の神々の集会場をさす。MSK 2.3.15 を参照。
- (32) 「疑いのない (akathamkatha)」という表現は BHSD の kathamkathā (“doubt”) を参照。「穢れのない (vigatāṅgaṇa)」という表現は BHSD の anaṅgaṇa (“spotless, free from evil” = niraṅgaṇa) を参照。
- (33) 「至福」と訳した śiva の語は、シヴァ神ではなく、インド仏教の伝統としては涅槃 (nirvāṇa) の同義語と見なしうる。SKILLING (1994), 48頁の表3を参照。ここで「彼が至福に到達した」ではなく「至福が彼に到来した」という構文になっているわけは、涅槃は大般涅槃、つまり仏陀の死を意味するからである。死が涅槃という姿で、歳をとった仏陀のもとに訪れたのである。至福 (涅槃) が人格化されて、動的に表現されている。
- (34) Śākyasiṃhajātaka (M. HAHN (2007), *Editio Minor*, p. 169), 116 ab の tataḥ prahaṣād iva sācalācalā mahī cakampe nibhṛtārṇavaṃśukā / という句が MSK 本詩節の前半6.4.8 ab の句ならびに MSK 1.3.15 c の nanartāmbudhivastrā bhūś の句と表現が類似する。またその Śākyasiṃhajātaka の同じ詩節の後半 116 cd の vitastanuḥ khe suradundubhisvanā diśaḥ prasādābharaṇāś cakāśire // の句も、MSK 1.3.15 b の文 devadundubhinisvanaiḥ / の句と表現が似る。この類似の理由については MSK 6.4.1 ab の注 (27) を参照。

- (35) 大地 (rasā) にかかる形容句「激しく動揺するその」(sā calācalā) を、sācalācalā (sacala-acalā) と読めば、「不動の山々をもつ」という別の意味になるのは、言葉遊びである。「甚だ無情感となった(女)」(ghana-arasā) の語は、女の若々しさとしての水気(汁気 rasa) を失ったことも意味するので、「堅硬な(女)」(kharā) という語の表現につながっている。この詩節は夫と死別した女を、仏陀と死別した大地に喩えている。大地は、みずみずしさを失って、土が硬化し荒んだものとなったが、その有様は夫と死別して悲歎し動揺し、すべての情感を喪失した若妻のようである。また大地はまるで森林という花を髪につけた、震動する山々の頂の冠を頭に被った女であるかのように見え、また悲歎によって人を震わせるかのように、大地は地震により、仏陀を亡くした大地の住民を震わせた。
- (36) ここで「撒き散らされた真珠に匹敵する」と訳した prakīrṇa-muktā-samatā-vaśikaram の複合語は「撒き散らされた真珠と同質にする支配力をふるう、真珠と同質化する力を行使する」つまり「撒き散らされた真珠との同質性を作る、実現せしめる」と理解した。
- (37) ナーガ(蛇王、龍)は頭部のフードの上に宝石をもつとされる。その宝石は時には如意宝珠(cintāmaṇi)である。彼らの住まいはしばしば海や河や池であり、また古木の中、井戸の中、雪山の山麓にあることもある。龍王宮は海水の下五百由旬にあると正法念処經(T17 402b)に記される。J. Ph. VOGEL (1926): *Indian Serpent-lore or the Nāgas in Hindu Legend and Art*, London, pp. 25-26, 32-33; 前田惠学(1959):「インドの仏典に現われた龍と龍宮」、『東海仏教』5輯、29-35頁を参照。
- (38) 「花などの香を持つ」と訳した kusumādyavāsin の複合語はいくつかの解釈が可能である。先のドイツ語訳では「花などによる香をもつ」または「花などから作られた香料をもつ」と訳すことを提案した。それは「花など」(kusumādya) と「香りあるもの」(vāsin) とを並列関係ではなく格関係と見たからである。パーリ聖典の大般涅槃經では「舞踏・歌謡・音楽・花輪・香料(gandha)をもって、尊師の遺体を敬った」と記されている(DN, II, p. 159)。「香りあるもの」(vāsin)の語に香料(gandha)の意味が入っていると考えることが出来る。しかし「花[や香料]などを運ぶ途中でいつのまに衣服に花などの香りがついてしまった者たち」という新しい解釈を取るならば、「花などの香りがついた」と訳してもよいように思う。今回はごく曖昧に「花などの香を持つ」と訳した。
- (39) 「様々な礼拝をなす」(vicitrakāra) の kāra の語は BHSD の kāra (“homage, act of worship”) を参照。「執行者たちによって」と訳した原語 āsitaṅṅ は、写本では āsitaṅṅ と記されているが訂正して読み、「聖なる儀礼に従事する」(pw, ās-, “8) in einer heiligen Handlung begriffen sein, einer Ceremonie obliegen”) という自動詞 ās- の過去分詞 āsita として「[儀礼]執行者」と理解した。
- (40) この詩節は仏陀の遺骨(dhātu) 崇拜を正量部が積極的に認めていたことの一つの証左となる。「彼の遺骨をやや多量に与えた」の訳は少し意識しているが、複合語を dhātu-prakara-ākāraṅṅātām と分解し、ākāraṅṅātām は辞書にないので、ā- (やや、いささか Cf. APTE

- s.v. ā-, p. 304, “with adjective ā has as diminutive force”) + karāla (大なる “great, large, high, lofty”) + tā (~であること) の造語と見て「やや大なること」の意味にとった。dhātu-prakara は遺骨の量・集積であるから、pāda d は「彼の遺骨の集積をややうずたかいものにした」「彼の遺骨の総量をやや大きいものにした」と訳せる。
- (41) 本詩節6.4.13の、仏陀が没した後に出てきた「多くの悪人ども」(bhūri-durjanāḥ) は MSK 1.4.2 に出てくる「すべての外道たちの教団」(aśeṣa-tīrthya-saṃghāḥ) のことである。
- (42) 「既述の」(yathokta) の語は「周知の」とも訳せるが、MSK 4.2.13～16 の箇所の記述が合誦を述べているので、「既述の、先述の」の意味に取った。
- (43) 「私」とは作者 Sarvarakṣita であり、作者は MSK という作品の最初の『序』と最後の三詩節で、この法話 (kathā) の作成の意図を述べる。
- (44) この『師の時節の経過』(guruparvakrama) という最終節のタイトルの意味は明瞭ではない。「師」(guru) は仏教の祖師(釈尊)あるいは複数の祖師たちを意味し、「時節」(parvan) は竹の節のように分割された時代、釈尊を含むそれぞれの祖師が現れる諸時代を意味するのではないか。「経過」(krama) は、釈尊という偉大な祖師が現れた時代が経過すること、もしくは祖師ごとに諸時代が連続して歴史が展開してゆく有様を表現するのではないか。
- (45) この作品名については、MSK 第1章『序』の1.1.2において、「かのお方が人びとの益のためにお説きになった、世界の生成展開期と帰滅期の法話 (vivarta-saṃvarta-kathā) を [私は] 再話しよう」と著者が述べている文と関連させて理解できよう。本作品の内容は、釈尊の生涯と説法を杵物語にして、その説法の内容として、世界の生成展開から始まり、帰滅して空無となる時までの宇宙の一大周期(大劫)を記述することを目的とする。Mahā-saṃvartanī-kathā とは、Mahā-vivartanī-saṃvartanī-kathā を省略したタイトルであると思われる。
- (46) 実際にこの MSK という作品の詩節を数えてみると、確かに390ある。作品には一詩節の欠落も無いことを私たちは知ることが出来る。
- (47) この跋文は作者本人によって計算されて書かれた可能性が高いと思われるが、「アナシュトゥブ韻律 (anuṣṭup-chandas) によって数えられた時には534詩節が量としてある」という記述が本当に正しいかどうかを確認してみよう。このような詩節量をどのように計算するかの模範を示しているのが、Michael HAHN が Śivasvāmin の Kapphiṇābhūdaya の出版につけた説明である：Michael HAHN & Gauri SHANKAR (1989): *Śivasvāmin's Kapphiṇābhūdaya. The Exaltation of King Kapphiṇa*, Delhi. Appendix by Michael HAHN, pp. xxx-xxxv (Table II). この研究を手本にして、MSK は全部で16種類の韻律が使われているので、韻律の種類ごとに音数を計算してゆこう。まず第一に、(1) Vaktra つまり Anuṣṭubh は62詩節ある：1.3.1～18; 2.1.8～13; 2.2.1; 2.3.21; 4.3.1～19; 4.4.1～15; 5.3.12; 6.1.7. これら Anuṣṭubh はすべて正規形 (Pathyā) であり、Vipulā 形は皆無である。Anuṣṭubh は1詩節が32音であるから $32 \times 62 = 1984$ 音となる。第二に、Samavṛtta 類の韻律の種類を次に見よう。(2) Upajāti は71詩節ある：1.2.1～4; 1.2.6～19;

1.2.21 ~ 26; 1.2.28 ~ 33; 4.2.17; 4.3.23; 5.1.1 ~ 7; 5.1.10; 5.1.12 ~ 13; 5.2.3 ~ 4; 5.2.7; 5.2.10; 5.2.12 ~ 16; 5.3.1 ~ 5; 5.3.9 ~ 11; 5.4.1 ~ 7; 6.1.1; 6.1.3 ~ 6. Upajāti は 1 詩節が44音であるから $44 \times 71 = 3124$ 音となる。(3) Indravajrā は17詩節ある : 1.2.5; 1.2.20; 1.2.27; 4.3.22; 5.1.9; 5.1.11; 5.1.14; 5.2.1 ~ 2; 5.2.5 ~ 6; 5.2.8; 5.2.11; 5.2.17; 5.3.7 ~ 8; 6.1.2. Indravajrā は 1 詩節が44音であるから $44 \times 17 = 748$ 音となる。(4) Upendravajrā は 5 詩節ある : 1.4.6; 5.2.9; 5.3.6; 5.4.8 ~ 9. Upendravajrā は 1 詩節が44音であるから $44 \times 5 = 220$ 音となる。(5) Indravamśā は 2 詩節ある : 1.3.19; 6.4.15. Indravamśā は 1 詩節が 48音であるから $48 \times 2 = 96$ 音となる。(6) Vamśastha は60詩節ある : 1.1.1 ~ 3; 2.1.1 ~ 7; 2.1.14; 2.2.2 ~ 13; 2.3.1 ~ 20; 3.1.26; 3.2.32; 4.2.18; 6.4.1 ~ 14. Vamśastha は 1 詩節が48音であるから $48 \times 60 = 2880$ 音となる。(7) Rucirā は 7 詩節ある : 1.1.4; 1.2.34; 3.3.25; 3.4.16; 4.1.10; 4.1.18; 4.2.6. Rucirā は 1 詩節が52音であるから $52 \times 7 = 364$ 音となる。(8) Vasantatilakā は25詩節ある : 1.4.11; 2.2.14; 2.4.1 ~ 4; 4.2.19; 4.3.20 ~ 21; 4.4.16 ~ 17; 5.1.8; 5.1.15; 5.2.18; 6.2.1 ~ 4; 6.3.1 ~ 5; 6.4.16 ~ 17. Vasantatilakā は 1 詩節が56音であるから $56 \times 25 = 1400$ 音となる。(9) Śārdūlavikrīḍita は 9 詩節ある : 1.4.3 ~ 5; 1.4.7 ~ 10; 5.4.10; 6.2.5. Śārdūlavikrīḍita は 1 詩節が76音であるから $76 \times 9 = 684$ 音となる。(10) Sragdharā は 3 詩節ある : 5.4.11; 6.1.8; 6.3.6. Sragdharā は 1 詩節が84音であるから $84 \times 3 = 252$ 音となる。第三に、Ardhasamavṛtta 類の韻律の種類を次に見よう。(11) Vegavatī は 1 詩節ある : 2.4.5. Vegavatī は 1 詩節が42音であるから $42 \times 1 = 42$ 音となる。(12) Viyoginī は 9 詩節ある : 4.2.7 ~ 15. Viyoginī は 1 詩節が42音であるから $42 \times 9 = 378$ 音となる。(13) Mālabhāriṇī は 1 詩節ある : 4.2.16. Mālabhāriṇī は 1 詩節が46音であるから $46 \times 1 = 46$ 音となる。(14) Aparavaktra は21詩節ある : 1.4.1; 4.1.1 ~ 9; 4.1.11 ~ 17; 4.2.1 ~ 4. Aparavaktra は 1 詩節が46音であるから $46 \times 21 = 966$ 音となる。(15) Puṣpitaḡrā は 2 詩節ある : 1.4.2; 4.2.5. Puṣpitaḡrā は 1 詩節が50音であるから $50 \times 2 = 100$ 音となる。第四に、最後に Jāti 類を見よう。(16) Āryā は95詩節ある : 3.1.1 ~ 25; 3.2.1 ~ 31; 3.3.1 ~ 24; 3.4.1 ~ 15. Āryā 韻律の音数は詩節によって増減するが、1 詩節は大まかに平均値として40音から成るとみなし、40という仮定値をあてはめて計算することを私は提案する。すると $40 \times 95 = 3800$ 音となる。さて、以上が MSK で用いられた16種類の韻律であり、これで全部の韻律の音数がわかる。以上の音数を全部足すと、17084音がこの390詩節の総計の音数となる。跋文によれば、この作品が534 grantha の量から成るといふが、534 grantha の音数とは幾らかを計算すると、1 grantha が32音であるから、 $534 \times 32 = 17088$ 音となる。この17088という数値は、先の実際の総計の結果の17084音と、4音しか違わない。音数を grantha (32音) で数える場合には、この4音は32音より少ないので、grantha 数の計算に変化を及ぼさないことになる。従って、跋文の作者が計算して作品の最後に書き示した grantha 数は、現存する作品の音節の総数と完全に合致することになる。作者の計算は正確であった。なお私は先に āryā 韻律をどれも40音として一律に計算したが、作者も恐らく āryā については同じ計算の仕方をしたと推測される。

(48)本文の完了後、作品名と作者が記され、さらに韻文の量 (grantha-pramāṇa) が記され

た後、この偈頌が写経生の後書が始まる前の位置に置かれて、この偈頌の前までが作者に属する作品本体で、この偈頌から後が写経生の付け足した文となることの、区切りを示す。この偈頌は「法身偈」「法身舍利弗偈」または「因縁法頌」「縁起法頌」と呼ばれ、大乘小乗を問わず仏教写本の末尾にしばしば記される。ye dharmā hetuprabhavā hetuṃ teṣāṃ tathāgato hy avadat / teṣāṃ ca yo nirodha evaṃvādī mahāśramaṇaḥ // というこの偈頌の文自体は正量部の伝統に属するのではなく、有部や大乘經典の梵語写本によく見られる系統のもので、この写本を筆写したネパールの写経生の伝統に帰せられる。

- (49)Newāri 文字の貝葉写本である A 写本が筆写された544年アーシャーダ月、西暦ではユリウス暦1424年 6 月 2 日から30日までの期間 (Adhika Āṣāḍha) か、もしくは1424年 6 月31日から 7 月28日までの期間 (Nija Āṣāḍha) になる。
- (50)Newāri 文字の紙写本である B 写本の筆写日、782年シュラーヴァナ月白分の15日は、西暦ではユリウス暦1662年 7 月20日 (グレゴリオ暦1662年 7 月30日) 日曜になる。
- (51)文献 X §203-222 の原文は、デルゲ版 東京大学所蔵版 中観部13, No. 3897, folio Ha 133b7-135b2; 北京版 No. 5869, Vol. 146, folio Nyo 35a8-37a7.
- (52)原文 'jig pa'i bskal pa chen po を「大なる帰滅の劫」と訳した。「大壞劫」と訳してもよい。この語は文脈から判断して、成住壞空の四劫の三番目の「壞劫」('jig pa'i bskal pa = saṃvartakalpa Mvy. 8279) を意味する。壞劫になぜ「大」がついているのかを考えると、恐らく正量部には別の (大ではない) 壞劫 saṃvartakalpa という語が別の意味で存在したため、それと区別する必要があったためとも考えられる。もしその推測が正しければ、別の (大ではない) 壞劫 saṃvartakalpa とは小三災の出来事を意味すると思われる。このように正量部が小三災の出来事についても壞劫 saṃvartakalpa という表現を使っていた可能性については、S. LÉVI (1932) が校定した Mahākarmavibhaṅga (正しくは Karmavibhaṅga) のテキストに *mahāsaṃvartakalpe という語が小三災の飢饉劫の出来事の記述に際して出てくるのが参考になるが、工藤順之 (2004) の報告によればその作品の写本 B では mahāsamva + + +、チベット訳では rnam par 'jig pa'i tshe とあり、ただし写本 A ではその語は無く abhidharme という表現になっている。S. LÉVI が再建した *mahāsaṃvartakalpe という語形を認めるかどうかについては、工藤は A 写本の異読に注意して決定を保留しつつも、「チベット訳に対応させることが一部可能な読みを残している写本 B の読みを採用することに校定上一定の合理性はある」と記している (239頁)。私も写本 B の読みを尊重することに賛成であり、写本 B の読みの方が lectio difficilior であり、それは正量部独特の用語であるために写経の伝承の途中で理解困難になって別の語 abhidharme に差し替えられた可能性もあるため、写本 B の困難な読みを当り障りのない A の読みに安易に代えるべきではないと思う。しかしチベット訳の rnam par 'jig pa'i tshe に相当する梵語は通常は *vināṣe, *vināṣane, *vipralope などであって (cf. NEGI p. 3067)、ただちに *mahāsaṃvartakalpe という訳語が支持されるわけではなく、特に mahā- の語がチベット訳で機械的に *chen po と訳されないことは奇妙で、注意する必要がある。チベット訳の伝承では mahā- が無い

*saṃvartakalpe であった可能性もある。

- (53) 文献X §5-8 に出てくる『[大]ブラフマー神の近侍である神々』の住処を意味する。
- (54) §210までで、成住壊空の四劫の説明を一通り終えたが、§§194-202では火災しか説明しなかったため、以下の§211から追加的に水災と風災の説明を行う。
- (55) この文献X §217 の韻文（蔵訳では各 pāda が15音から成る）は原文の梵文もかなり長い韻律で作られた一詩節であったと思われるが、この詩節をさらに長大な詩節に書き直したものが、MSK の 6.2.5 の詩節である。§217 の詩節は、文献Xの作品全体を締め括るために置かれる最後の詩節としての役割を担っていると思われるが、さらにその後§218から劫の時量についての補足的な説明が続く。この補足的な記事も、MSK の作者サルヴァラクシタが利用した文献Xにすでに付いていたらしく、この作者は MSK の第 6 章 1 節の中にそれに相当する記述を組み込んでいる。
- (56) この§221の「賢劫などの大劫」という表現を根拠に、正量部は賢劫 (bhadrakalpa) を現在の 1 大劫につけられた名と見なしていたことが確認できる。賢劫とは、我々が住むこのサハ（娑婆）世界の現在のみでの 1 大劫（成住壊空の 1 周期）の名である。他方で現在の住劫の20中間劫を賢劫と定義する意見もあるが、これは現在の成住壊空の 1 周期を賢劫とみなす意見と矛盾するわけではなく、実質的には同一である。漢文大蔵經文献に見られる、賢劫をめぐる意見の相違については、望月仏教大辞典の「賢劫」の項（940-941頁）に詳しい記述があるが、それを見るとこの賢劫という時間の長さの理解については、中国の注釈家の間で異なる意見があったようである。それは成住壊空の 1 周期を大劫とみなしつつも、火災水災風災の64転の 1 周期をも大劫とみなす考え方もあり、宇宙の最大の周期である大劫の概念の捉え方に二種類があったことから、賢劫の捉え方における意見の相違が中国の学派間に生じたものと思われる。しかし64転大劫を賢劫とはみなさないのがインドにおいては通説であった。さて賢劫においては釈迦牟尼仏が四番目の仏であるというのが、根本分裂以前からの全仏教徒の変わらない理解であり、部派分裂後も諸部派共通の見解であったが、しかしこの賢劫中に釈迦牟尼と弥勒仏以後に多数の仏が出現するのかどうか、その点について諸部派の見解は分かれた。パーリ上座部は賢劫に 5 仏の出世しか認めないが、正量部は賢劫に500仏の出世を、大乘は賢劫に1000仏の出世を認める。この正量部の特有の見解は、有為無為決訳の 8 章の次の文（北京版139b6）から知られる：「まさしくこの賢劫において、5 仏が出現する、と或る人々（細注：聖上座部）はいう。ちょうど500 [仏] である、と別の人々（細注：正量部）はいう。1000仏である、とまた別の人々（細注：大乘）はいう」。細注の記述は北京版にあり、デルゲ版には無い。この貴重な細注についての指摘は、Peter SKILLING (1987): “The Saṃskṛtasaṃskṛta-viniścaya of Daśabalaśrīmitra”, *Buddhist Studies Review*, 4.1, p. 8 においてなされた。
- (57) 大劫が一、十、百と積まれていって阿僧祇という時の単位に至るので、大劫の説明が終わった後で、次に「阿僧祇」の単位の説明に入る。ここで文献Xが「阿僧祇」が第60桁目の数の名称であると説く点で、正量部の見解は有部の見解と合致することがわかる。世親は俱舍論世間品第93頌釈 (PRADHAN, p. 181) で、聖典に「三阿僧祇劫に仏果を

得る」と説かれる場合の「阿僧祇」(asaṃkhyā)の語が、単に無数の意味ではなく特定の数の表現であり、1桁から一、十、百、千……と数えて、第60桁目の数の名称として阿僧祇を理解すべきことを、説明する。世親はそこで或る単立の契経(muktakasūtra, 四阿舎に含まれない経)の伝承を用いて、1桁から60桁までの数の名称を全部列挙しようとして、52個の数名を挙げているが、60に数が八つ足りないのは、伝承の途中で八つの数が忘失されたためと説明する。俱舎論と同様の52個の数名の記述は、大毘婆沙論巻百七十七 T27 891a9-b13 (『国訳一切経毘曇部』16、3683-3684頁)にもある。なお翻訳名義大集 Mahāvīyutpatti 7988-8048 は俱舎論に基づく説として60桁の数名を挙げているが、「阿僧祇」(asaṃkhyā)は第52桁目に出てくる。53桁から60桁までは後代の編集者によって補われた数の名であるが、本来は「阿僧祇」が第60桁目に来る形になるように補うべきであるのに、そうしていないのは、編集者が単に形式的に60の数を満たそうとして、八つの数の名を後ろに追加したためであろう。Mahāvīyutpattiはこの俱舎論に基づく数目表を出す前に、7697-7820で漢訳大方広仏華嚴経を出典とする数目表(cf. T9 586a-c, T10 237b-238b)を挙げ、7821-7953で梵文の華嚴経入法界品 Gaṇḍavyūha を出典とする数目表を挙げ(cf. Gaṇḍavyūha, ed. Daisetsu SUZUKI & Hokei IDZUMI, II, 1949, pp. 132-134)、さらに7954-7987でラリタヴィスタラを出典とする数目表を挙げる(cf. Lalitavistara, ed. LEFMANN, S. 147-148)。これら三者は大乗の伝承に属するもので、60桁にこだわらず、小乗有部の伝統とは大きく異なる。小乗正量部に属する文献Xは§222で60桁の数の名称を全部列挙するが、mahāvīyutaの次の第14桁目から俱舎論が伝える数の名称とかなり食い違ってくるのは、それが正量部固有の伝承に従っているためであろう。文献X §222の正量部説では、俱舎論のように途中八つの数の忘失を入れることなく60桁の数名を挙げるが、60桁目は mahābālākṣa であり、その次の「阿僧祇」は61桁目に来ることになる。正量部では一の位を飛ばして、61桁目を60桁目と見なす数え方なのであろうか。なお正量部と有部が共に「阿僧祇」を第60桁目の名称と見なすのに対して、パーリ上座部のチャリヤーピタカ註(Cariyāpīṭaka-aṭṭhakathā)では60桁目の単位が「阿僧祇」であるという或る者たちの意見が紹介された上で、その意見が間違いであるとチャリヤーピタカの註釈家によって批判されている。大劫を表現するための「阿僧祇」は文字通りの無数と理解すべきであるとする。勝本華蓮(2007):『チャリヤーピタカ註釈』、国際仏教徒協会、17-18頁と21頁を参照。なお有為無為決択には、パーリ上座部の意見として§223の様な「阿僧祇」の説明の仕方もあるが、出典が不明である。

- (58) ここまでは Mahāvīyutpatti 7989-8001 の有部伝承と一致するが、次の桁から違う。正量部特有の伝承となる。
- (59) ただし文献Xからの長い引用が §220 までで終わっていた可能性もある。§221-222 は Daśabalaśrīmitra が他の正量部文献を見て付け足した説明かも知れない。
- (60) §223-224 の原文は、デルゲ版 東京大学所蔵版 中観部13, No. 3897, folio Ha 135b2-4; 北京版 No. 5869, Vol. 146, folio Nyo 37a7-b3.
- (61) この§224の記述から、正量部も菩薩が成仏するまで三阿僧祇かかったという意見を認

めていたことがわかる。これは四阿僧祇と十万劫かかったという説をとるパーリ上座部の伝承 (Buddhavaṃsa, ed. MORRIS, PTS, p. 6 [= JAYAWICKRAMA ed., PTS, p. 9]; Caryāpiṭaka, ed. MORRIS, p. 1 [= JAYAWICKRAMA ed., p. 1]; Milindapañha, PTS, pp. 232-233; Visuddhimagga, PTS, p. 302; Jātaka-aṭṭhakathā, PTS, pp. 2, 3, 15) とは大きく異なる立場であり、むしろ有部に近い。有部の見解によれば三阿僧祇かかり、第一の阿僧祇において前釈迦牟尼以来、Ratnaśikhin 仏に至るまで7万5千の仏を供養し、第二の阿僧祇においては Dipamkara 仏 (燃燈仏) に至るまでの7万6千の仏を、第三の阿僧祇においては Vipaśyin 仏に至るまでの7万7千の仏を供養した。俱舍論業品第110頌釈 (PRADHAN ed., p. 266; 大正蔵 T29 95a) や大智度論卷四 (T28, 86c) や大毘婆沙論卷百七十八 (T27 892c4-11) 等の有部伝承を参照。この菩薩の修行円満の劫数としての三阿僧祇の伝承の問題は、望月仏教大辞典 1452-1453頁と de L. VALLÉE POUSSIN, Abhidharmakośa, III, pp. 188-189; IV, p. 224 に説明があるが、最近では Peter SKILLING (1996), pp. 159-173 によって詳細に取り上げられた。SKILLING がそこで指摘するように (p. 170)、正量部が伝える7万7千、7万6千、7万5千という数の順序は、有部が伝える7万5千、7万6千、7万7千という数と逆になっている。また第三の阿僧祇の最期の仏の名前が違う。正量部の伝承では Indradhvaja 仏 (sangs rgyas dbang po rgyal mtshan)、有部では Vipaśyin 仏である。ただし、Indradhvaja 帝釈幢 という仏の名は、根本有部律毘奈耶薬事卷第十五では、第二の無量劫の最後の仏として出てくる (T24 74c25-27)。この薬事の伝承は、第一の阿僧祇に前釈迦牟尼から護世仏まで7万5千の仏を供養し、次に第二の阿僧祇に始めの燃燈仏から帝釈幢に至るまで7万6千を供養した、次に第三の阿僧祇に始めの安穩日仏から迦葉仏に至るまで7万7千を供養した (T24 74a15-75b26) と伝えるから、上述の俱舍論の伝承とは異なる有部の別系統の伝承である。この根本有部の薬事に見られる伝承は、正量部の伝承と全く一致するわけではないが、他文献と比較して最も近い位置にあるといえる。このことは SKILLING (1996) も指摘していないので、補足しておきたい。

- (62) 漢訳の欠損部分は訳されなかったというより、訳出後のかなり早い時期に散逸したと考える方が自然であるが、訳場で真諦が利用した写本がここ以降の葉は欠けていたため、別の写本の入手を待っているうちに、終に訳せずに終わったという事情もありえなくもない。
- (63) もちろん Loka-p は立世論原典の本来の姿を完全に伝えているのではなく、パーリ語版の編集の際にかなり多くの文が刈り込まれて簡略化され、しかも現代まで伝持される途中に写本伝承の著しい劣悪化を被っているテキストであるが、Loka-p に従って漢訳の失われた箇所をある程度復元することが可能である。
- (64) 「十千世界に」(dasasahasīlakadhātuyā) という言葉が注意される。火災の破壊の時は、「一千世界にひとり大梵天だけが残る時が来る」と記述されるのに対して (岡野 (2009), 10頁の L132 の文を参照)、この水災の破壊の時は、その上の世界までを破壊するので、それで「十千世界」と故意に表現を変えているのかも知れない。
- (65) 数語意味不明。otarakāto yāpanehakaṃ とある (Loka-p, DENIS, I, p. 217)。別の箇所に

- も (I, p. 201) 同じ表現があるが、ocirakāto yamehakam とそちらでは綴られていて、意味不明のままである。
- (66) 前の L9 で「10 中間劫が過ぎ去った」と、衆生世界散壊に 10 中間劫かかったことを説き、さらにその後に器世界散壊に 10 中間劫かかったため、この L18 で「20 中間劫が過ぎ去った」と説かれる。このように衆生世界と器世界の帰滅にそれぞれ 10 中間劫かかるとするのが正量部の説である。この点を考えると、以前に出てきた Loka-p の文で、岡野 (2005a) の 19 頁の L28 に、「それ (世界) にとって、ここまでが『物的世界の帰滅』である。ここまで、10 中間劫が過ぎ去った」という文があるが (原文 : ettāvātā dasa antarakappā nikkhantā honti. DENIS, I, p. 198, l. 5)、その文の「10 中間劫」という語は「20 中間劫」に訂正すべきであり、写本伝承の過ちと見なすべきであろう。
- (67) ここまでが水災の記述である。次に風災の記述が続くが、その出だしは火災の記事にあるものと同じである。
- (68) この L22 の *tatiyā samvaṭṭani* (第三の帰滅) の読みは、DENIS による訂正であり、彼が利用した二写本では *pathamā samvaṭṭani* (第一の帰滅) と記されている。L10 に「第二の帰滅」という表現が水災という意味で出てきたので、DENIS がここでは風災として「第三の帰滅」であるはずと判断して第一を第三と訂正して読んだのであろう。しかし L22 の「第一の帰滅」という写本の読みがもし衆生世界散壊を意味し、L28 の *dutiya-samvaṭṭani* (第二の帰滅) が器世界散壊を意味し、両者が呼応しているとすれば、DENIS のこの訂正は必要なかったことになる。
- (69) DENIS はこの L28 で、二写本の *dutiya-satta-samvaṭṭani* (第二の有情の帰滅) の読みを *dutiya-samvaṭṭani* (第二の帰滅) と訂正して読んだ。この訂正は必要である。
- (70) 岡野 (2005a) の 18 頁の L22 の文を参照。
- (71) 原文は *āpokhandho pi hetṭhimassa vāyokhandhassa chindeti*。とあって、劣悪な写本伝承のため、構文が乱れている。これは水輪が下方にある風輪と分離する、という意味であろうか。なお世記経三災品には「地下の水尽き、水下の風尽く」(T1 140c29) という文がある。
- (72) この箇所の Loka-p 原文は「たとえば、力士の風が (*muṭṭhika-vāto*) 虚空に吹き上げて粉々に吹き散らすであらうように」(*seyyathāpi nāma muṭṭhikavāto ākāse ukkhipitvā vidhameyya*) とあるが、劣悪な写本伝承のため、このままではかなり不自然な文であるといわざるをえない。そこで世記経三災品の「猶、力士手に輕糠を執りて空中に散らすが如し」という文 (T1 140c25) を参照して、「たとえば、力士が [初穀を] 虚空に吹き上げて粉々に吹き散らすであらうように」と訳した。
- (73) 続く第 16 章で Loka-p は地水火風の四元素 *dhātu* についての説明を行う。写本伝承の劣悪さのため、意味がつかみかねる箇所が多く、E. DENIS の仏訳 (II, 185-187 頁) では、少しの部分だけ翻訳が試みられている。この第 16 章が本来の立世論の原典テキストにもあったのかどうかは不明であるが、漢訳立世論の末尾の欠損した部分に、この第 16 章も属していた可能性はあると思われる。この章の内容が犢子部・正量部の思想を知る上で役立つかどうかをきちんと検討する必要があり、今後の研究が待たれる。

参考文献

(本論文中で名前と発表年だけを記すにとどめた文献の書誌情報を以下に挙げる)

- Michael HAHN (2007): *Haribhātṭa in Nepal, Editio Minor*, the International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, Studia Philologica Buddhica Monograph Series XXII.
- Takayoshi NAMIKAWA [並川孝義] (1993): “The Transmission of the New Material Dharmapada and the Sect to which it Belonged”, 『仏教研究』 22, pp. 151-166.
- Louis RENOU (1975): *Grammaire Sanscrite*, Tomes I et II réunis, Paris.
- Frank E. REYNOLDS & Mani B. REYNOLDS (1982): *Three Worlds according to King Ruang. A Thai Buddhist Cosmology*, Berkeley.
- Peter SKILLING (1994): “The Synonyms of Nirvāṇa according to Prajñāvarman, Vasubandhu and Asaṅga”, *Buddhist Studies Review*, 11 (1994), pp. 29-49.
- Peter SKILLING (1996): The Sambuddhe verses and later Theravādin Buddhology, *Journal of the Pali Text Society*, 22, pp. 151-183.
- Peter SKILLING (1997): “On the School-affiliation of the ‘Patna Dhammapada’”, *Journal of the Pali Text Society*, 23, pp. 83-122.
- H. C. WARREN (1950) [ed.]: *Visuddhimagga of Buddhaghosācariya*. Revised by D. Kosambi. Cambridge, Mass. (Harvard Oriental Series 41)
- 岡野潔 (1994): 「新発見の仏教カーヴェア Mahāsaṃvartanīkathā —— 特に Amṛtānanda 本 Buddhacarita に見られる、その借用について ——」、『印度学仏教学研究』 第43巻 1号、1994年、386-391頁。
- 岡野潔 (2005a): 「『大いなる帰滅の物語』 (Mahāsaṃvartanīkathā) 第5章2節～4節と並行資料の翻訳研究」、『哲学年報』 64輯、1-32頁。
- 岡野潔 (2009): 「生きものが再びいなくなる時代 —— 『大いなる帰滅の物語』 第5章1節にみる正量部伝承 ——」、『哲学年報』 68輯、1-26頁。
- 工藤順之 (2004): 「Karmavibhaṅga 第61節における付加部分の検討 —— 正量部所属説有力資料とされる一節」、『創価大学・国際仏教学高等研究所年報』 7号、225-254頁。
- 水野弘元 (1982): 「梵語法句經 (SDhp) の研究」、『仏教研究』 11、1-48頁。

本研究は科研費(19520052)の助成を受けたものである。